

志賀重昂、フィリッピン各地を跋渉調査した佐野常樹などが挙げられよう。その外有名無名の南方發展論者が存してゐたことであらう。

元來明治十年代・二十年代の青年壯年の間には夢が多かつた。久しい間掌大の島中を天地として、喧しい煩瑣な社會制度の下に跼蹐してゐた者が、俄かに自由な廣大な天地が目前に開け、海には蒸汽船が、陸にも陸蒸汽が走るやうになり、今まで禽獸の如く、別世界の動物のやうに思つてゐた碧眼紅毛の夷人が自由に入り込み、文明開化と稱して、すべてのものが一日一日と變つていくのをみれば、夢の多いのも無理はなかつたのである。

政治に、學問に、實業に、教育に多くの夢を育むやうな時代であつた。頃日友人松山高商の賀川英夫君から、同君の嚴父故賀川容兼氏の遺著「理想」を贈られた。一讀すれば、當時の青年學徒の意氣頗る高きを覺へるものである。

「世界の列國は早晩合して數十となり、結んで八九となり、更に集つて二三となり、果ては渾圓球上唯一の大團體を見ん」

と豫言し、さらに最後にわが民族の使命を高唱して次ぎの如くいふ。

「東洋諸邦を混一し以てその幾億の生靈をして悉くわが皇上の至厚の聖澤に浴せしむるは、これ豈大和民族の素志にあらずや。歐亞兩陸を鍛て一團となし、人種の異同を問はず、彼我の感情を棄て共にわが皇上の無量の仁徳を仰ぎ奉るは、これ豈大和民族の素志にあらずや。大和民族の素志はこれに止まるにあらざるなり。渾圓球上を一括し以て萬世一系のわが皇上を世界の元首と仰ぎ奉るは、これ豈大和民族の素志にあらずや。將來吾人の交通し得べき所、來往し得べき限り、月界星界を問はず盡く無限の聖光に浴せしめ、以て神統無限のわが皇上を宇宙無限の元首と仰ぎ奉るは、これ豈大和民族の無限的抱負にあらずや。無限的理想にあらずや」

夢の南

その月界星界にも國あり、これらと交通すべしといふに至つては、今なほ夢に過ぎないかも知れないが、大東亞共榮圈を豫見せる點は、すでに今や單なる夢といひ得なくなつた。現實の帝國議會において首相の施設演説にさへ現はれてゐるのである。だが明治二十八・九年頃二十代の青年賀川氏の夢の頗る雄大なものであることは、立論の當否は暫く置き、これを認めることが出來よう。

明治前期において圖南の夢を始め、かうした夢が次々に語られたのは何故であらうか。新しい世界が展開されたがためであるといふだけでは、まだ不十分のやうである。當時の議論の多くが著しく西洋科學の

影響を受けてゐることが認められる。殊に社會進化論の影響が大である。人類は競争に依つて進化し、發展した。競争場裡にあつては優勝劣敗である。民族發展の上においてもこのことは免れない。故に先づ優者たらざるべからずといふ議論から、わが國をして歐米先進國と同等たらしむべき努力が始まる。明治二十年代において、すでにわが國は歐米に劣らずといふ議論さへ現はれてゐる。

さうした自負はイギリスの實例に依つて一層強められ、可能なりと考へられた。イギリスも北西の小島國に過ぎない。それが海外發展に依つて世界最強の大國となつた。イギリス學ぶべしといふ考へから、海外發展の夢が生まれた。このことは古く信淵の議論のうちにも現はれてゐる。わが國がイギリスと同じ島國であるといふことは、嚴密にいへば何ほどの關係もないことではあるが、當時の人人には心強く感じたのであらう。「東洋のイギリス」と稱して自ら誇りがましく感じてゐたので解る。

だが當時の人人の夢を育てたものは以上のものだけではない。それ以上に日本民族の優秀性に對する自負心の存してゐたことが強い力となつてゐる。萬世一系の皇室を戴くこと、外敵の未だ犯すことなき國土、さうした傳統の下に育成された民族的精神には、底力のある根強さがある。前述した豊太閤の三國統一の夢の如きも、その後の者に大きな刺戟を與へるに役立つたともいへるだらう。さうした歴史を守るためには、今や何をなすべきかといふ考へが、不知不識に明治初期の青年の心を捕へ、多くの夢を生んだのであらう。

明治年代にあつてそれらは確かに一つの夢であつた。聞く者はいふまでもなく語る者もこれを夢とし、理

想とした。今日それら南方の諸州に日章旗の飄るのを、それらの人人に見せても、なほ夢だと思ふかも知れない。しかしそれらの夢が今日の現實を生んだのである。夢をもたぬところに努力は起らない。努力に依つて國力が充實されて來れば、不可能事も可能となり、夢が夢でなくなる。二・三日來、讀賣新聞紙上に武者小路實篤氏が一流の卒直な表現で、將來の帝都東京を書いて居られる。勿論現實の東京はそれと比較にならないほど貧弱である。その意味では武者小路氏の議論も一つの夢ではあるが、同氏が理想村の昔から、常に夢の實現に努力されてゐるのを見て、敬服してゐたのである。さうした夢は必ずしも、その人一代で完成されるものではない。もし出來れば、それは夢ではなくなる。さうした夢をもつ人があれば、何時かその夢を實現する時代も來る。多くの發明・發見や大事業もかつては夢であつた。その意味で私はさうした夢を尊ぶものと思ふ。

(昭和十七年六月十四日)

初期經濟學者の南方經略論

一 江戸時代と南方問題

何人と雖もその父母兄弟姉妹妻子一族を愛さぬものはあるまい。假令日常相接觸し、互に反感をもつてゐる者でも、永くそれらの人人と相離れて生活する時には、思慕の情の濃かなることを覚えるであらう。その生を享けた土地に對し、深き愛著の念をもつことも亦人情の常であらう。故郷の舊き桎梏を嫌つて、遠く他郷に走つた者でも、年を経るにつれて、故郷忘れ難しの念を抱くであらう。殊に日本人にはこの觀念が強いやうである。

それらは一方からいへば、國土を愛する至情ともなるが、他方からいへば、遠く海外發展の雄圖を企てる上には、一つの大きな缺陷ともなる。今日の北米合衆國は誰も知るが如く、イギリスの植民地であつた。本國から獨立して、終に今日の盛大をなした。今や却つてイギリスの方がその屬邦たんとする傾向さへ示してゐる。アングロ・サクソン民族の母國に對する觀念には、われわれ日本民族の祖國に對する觀念とは著しく相違するものがあるやうに思ふ。

日本人の祖國を愛する觀念は頗る強い。だが他方宇内を家となす精神も古くから存してゐる。ただ江戸時代三百年に近い永い間の消極的政策が動もすれば、陝隘な天地に踞するの風を助長した嫌がある。足利末期以降における南方諸國への發展も阻止され、狭い日本本土のうちに桃源の夢を貪り、しかもそのうちにあつて、各自藩中心の政策を行なつてゐたから、勢ひ南方諸國に對する知識もなくなり、興味も起らなくなつてしまつた。徳川幕府の鎖國の方針は日本人のもつ海外雄飛熱を冷却してしまつたのである。

しかし元來日本人はそれほど消極的な民族ではない。勿論一部には優秀な外國文化に壓倒され、思想的に外國崇拜の強い缺陷があつたが、かなり強い發展力をもつ民族であり、海外渡航を恐れるやうな民族ではない。嚴重な禁令の布かれてゐた江戸時代にあつても、秘かに小船に乗つて沖合で異國船と交通する者も少なくなつたのである。

だが江戸時代の人人に問題とされたのは、多く南方ではなくして北方であつた。元祿の頃徳川光圀に依つて企てられたのも蝦夷貿易であり、並河天民・深見玄融、又下つて後期の工藤平助・本多利明・馬場正通等にしても何れも北方開發論であつた。又國防論の如きも主として北方を問題としてゐた。これには勿論理由があつた。初期にあつては、北方から出た滿洲族が明朝を滅ぼし、明の遺民のわが國に渡來する者が多く、一般に注意がこの方面に向けられたのは當然であらう。後期にあつてはロシアの東方發展が起り、何となくこの方面に危懼の念を感じざるを得なかつたのであらう。

しかし南方が何時までも閑却されてゐるわけではない。元來日本文化の發展が南方に始まり、北方に及び、江戸時代にあつても、殆ど唯一の異國文化との接觸點は南方の長崎であつた。長崎が平穩無事である限り、この方面に對してさまで不安を感じてゐなかつたやうであるが、やがてイギリス船等の渡來をみるに及んで、漸く識者の間には南方問題が取上げられるやうになつた。従つて江戸時代にあつても、南方經營に注意する學者が皆無であつたわけではない。佐藤信淵の如きはその最も著名なる者である。

二 佐藤信淵の南方發展策

わが經濟論者のある者が南方經營に注目するやうになつたのは、明かにイギリスの海外發展に刺戟された結果であるといつてよい。從來多くの人のいふが如く、わが國も島國、イギリスも島國、その地理的條件の外形的相似が——それは極めて皮層的觀察に過ぎなかつたけれども——イギリスを意識的に、もしくは無意識的に模倣させたのである。佐藤信淵の如きは明かにイギリスと比較して

「抑日本の邦たるや、其地理亞細亞大洲東南の海中にあつて：：氣候溫暖にして物産豐饒なり。其繁華富盛なること、世界中に共に比すべきの國なし。而して西洋の人は我日本を以て暗厄利亞國（イギリス）と相比方す。今の世に當ては「エキリス」國兵強く且富盛にして、海國の屬國極めて多く、其威世界を震

動するを以て、我日本に對當するが如し。然れども其本國の地は：：：：北地にして且氣候寒冷、其物産の我日本に及ばざる事論をまたすして知るべきなり」（防海策）。

イギリスがその戰勝の餘威をかつて次第に南洋をその手に收めつつあるのに對抗して、先づ呂宋と巴刺臥亞二國を占領し、この二島を圖南の基地とし、瓜哇、渤泥以南の諸島を經營せんとするのが、信淵の南方發展策である。

信淵がこれらの著作をなした弘化頃、イギリスの東洋侵略はすでにその基礎を確立してゐた。イギリスがシンガポールを獲得したのは一八一九年、わが文政二年のことである。その香港を取得たのが一八四二年、わが天保十三年に當る。天保十五年が改元して弘化元年となつたのであるから、信淵の議論を直ちに實行に移したとしても、すでに遲きに失する。況んや當時の國內の状況や軍備については、かかる行動を起すには、最も不適當な状態にあつた。不遇の民間學者たる信淵の議論の如きは殆ど一顧する値ひもなかつたのは當然である。明治維新の混亂時代にあつては、内外ともに多事であり、殊に先づ國內體制を整備することが何よりも緊急のこととされたから、南方問題の如きは、暫く忘却されてしまつた形になつてゐた。

三 菅沼貞風圖南の熱情

しかし信淵に依つて與へられた問題解決の方向——日本はイギリスと同様の海島國であること、イギリスが世界に雄飛する所以がその植民的發展と、その世界第一の海軍國にあること、従つて日本を富強たらしめんがためには、イギリスを手本とすべきこと——この方針は明治以後になつても一層強調されることになつた。殊に明治十年西南の役以後、明治新政府の基礎も漸く確立され、政治方面では議會開設の見通しもつき、經濟方面では中央銀行たる日本銀行の設立もみ、どうやら新しい經濟體制に應ずる形式も整ふやうになつた。明治二十年代になると、經濟論者のうちにも南洋方面に注意する者を生じた。

最近頗る有名になつた菅沼貞風もその一人である。明治二十一年の夏、帝國大學を卒業し、暫く教鞭をとつてゐたが、海南諸邦の事情を探求し、貿易植民の業に携らんとする雄心抑へ難く、翌二十二年漸く志を達し、マニラに至り、あること僅かに五ヶ月、二十有五歳の若さを以つて客死したこの青年學徒の業績は滅却すべからざるものがある。誠に人はその年齢を以つて價値を計るべきではない。

彼がその卒業論文として提出したといふ「大日本商業史」は今なほ學界に高く評價されてゐる。彼の商業史が外交史の色彩の強い所以も、又貿易史となつてゐるのも、彼自身の志すところから當然のことであつた。貞風がどの程度までイギリスの海外發展を理想としたか確實には知ることは出来ない。しかし當時の多くの識者と共に、日本を富強ならしむる手段として、貿易植民に依る海外發展の必要を痛感してゐたに違ひない。

四 田口鼎軒の南洋經略論

實に明治二十年代の日本人にとつて、常に忘れ得ぬことは、日本を西洋第一等國の水準に引上げることであつた。然るに事實はどうか。國民は未だ目ざめてゐない。當時の自由主義經濟論者として知られてゐた田口鼎軒は、明治二十三年の東京經濟雜誌上に「南洋經略論」一篇を草し

「是を以て開港以後已に三十餘年を経過したる今日と雖ども、世間往往南洋を以て人類の行く能はざる一地方の如く思惟せるものあり。先覺の諸士は歐米諸洲を巡行し世界を一週するを以て遠路とせざるなり。然るも尙ほ南洋諸島を以て天涯地角夢魂達し難きの地となせるもの少なからず。我當局の有志は白雪皚皚たる北海道を開拓せんと欲して、巨萬の財を散じ、且つ現に巨萬の財を散じつつあるなり。然り而して南洋の事に至りては一も訪ふ所なし」

と嘆じてゐる。事實南洋發展を策せんがためには、わが海事思想をもつと養成する必要があつた。故に鼎軒は

「余輩嘗て屢ば明言せし如く我國防には海軍を以て主要となすものなり。而して此目的を達する方法たる敢て軍艦の多きを以て足れりとするにあらず。我商業艦隊の増進するを以て永遠なる、堅固なる、且節儉なる國防と思惟するものなり。而して此商業艦隊を増進する方法豈夫れ南洋諸島の貿易を増進し、之に植民を興し以て我日本國と此諸島との交通をして頻繁ならしむるに歸せざるを得んや。故に余輩は我日本同胞の奮起して志を南洋諸島に伸ぶるに至らんことを希望するに於て殊に切なり」

この海國日本の發展を切望する聲は當時の指導者たりし人人の一般の聲であつたらう。だが永く鎖國生活に慣れた一般の民衆は容易にこれに應ずるやうにもみえなかつた。南洋方面の研究も未だ極めて不十分であり、たまたま存するものも、その南洋經營論と同じく、ロオマンチックの香の高いものであつた。

五 科學的な南方經營論の要請

明治初年のわが貿易植民發展論・南洋進出論がイギリスの發展に刺戟されたものであることは認められるが、それだけではなかつた。わが民族がさうした植民的發展に十分なる素質を有することを實證するに足る史的事實を有することが、かうした議論を力づけるに與つて力があつた。豐太閣の大規模な三國征討計畫もその一つであるが、それよりも以前に存してゐたわが民族の南洋方面への發達はさらにそれ以上の効果があ

つた。菅沼貞風は「新日本の圖南の夢」と題し、その南洋經營論を述べ、その後篇を「舊日本に愧づる勿れ」と題し、原田孫七郎・松倉豊後守などの圖南策を述べ、それらが採用されなかつたことを遺憾としてゐる。われわれが子供の頃から聞き馴れた山田長政にしても、濱田彌兵衛にしても、過去の日本人にその人あることを教へるものであつた。

だが鼎軒がすでに歎じてゐるやうに

「歐洲諸國は夙に之を占領し、其土人を征服し、其の國旗を公示して、以て其所屬たることを宣言せるもの多きが如し。去れば今日にして我邦人の之を占領するは事の最も難きものなりとす。豈に亦た惜しからずや」

當時のわが國力を以つてしては、到底これら英・米・蘭等のヨーロッパ諸國に戦をいどむことは、明かに「事の最も難きもの」であつた。その海軍は僅かに三千噸級の松島・浪速・高千穂などを主力にするに過ぎなかつた。鎮遠・定遠の甲鐵艦を有する支那艦隊にさへ及ばなかつたのである。

たまたま本文を草しつつある時、側のラジオはシンガポールの陥落を報じてゐる。その戦捷のニュースに次いでいくつかの放送がなされ「敵は幾萬ありとて」といふ古い軍歌が奏されてゐる。子供の時以來、幾

その豫言は實現した。シンガポールに朝日の御旗をさし立てた。しかし大東亞を建設せんとする新日本の南洋發展策は單なるイギリス帝國主義の發展を羨望した模倣政策であつてはならぬ。又單に過去の傳統を誇る海外雄飛論であつてはならぬ。明治初期の圖南論のやうなロマンチックな夢物語でなく、あらゆる角度から科學的に十分検討せられた南方經營論でなければならぬ。今日の經濟學者に要求さるところは、貞風・鼎軒等の議論から數百歩進んだものでなければならぬ。むしろわれわれの仕事は今後にあるといふべきであらう。

(昭和十七年二月十五日)

度か唱ひ、かつ耳にした懐しい歌である。が今改めてそれを聞く時、何ともいへぬ感慨にうたれる。難攻不落を誇つたシンガポールが陥ちた。南洋は完全にわが軍の制壓下であり、わが内海にも等しいものになつた。圖南の夢ではなくして、現實の事實となつた。貞風は歌つた。

「ニコライスク」の其の西ゆ。

「シンガポール」のその東、

朝日の御旗さしたてて、

言向けはてん時もがな、

八州の中にくぐもるは、

鎖國の夢の半から覺め、

知るや知らずや昔し人、

見ごと圖南の策あるを、

白人紅夷はたけくとも、

彼も人なり我も人、

新日本の思出に、

かくこそあれと期るなり。

明治二十年代の南方發展論

一

大東亞戦争の目ざましい戦果に依つてわが勢力下に歸した南方諸島が昔からわが民族にとつて馴染の深い地域であつたことはいふまでもないが、鎖國時代はいふまでもなく、明治になつてからも、今日ほど強く國民に刺戟を興へたことはない。南方へ、南方への聲があまりに強く、北方への發展を忘れたのではないかと秘かに恐るるほどである。そのために急に今さらのやうに、古い南方發展論が顧られ、又古い呂宋助左衛門や山田長政が新しい装をもつて世に現はれるやうになつた。

それらの古い人人の活動は暫く置き、明治以後に南方經營論が行なはれたことがあるかどうか。最近頗る有名になつた菅沼貞風以外に南方發展を主張した人人はなかつたのか。新聞や雑誌に南方に關する議論を述べた者はなかつたのか。友人西田長壽君を煩して、明治初年の新聞雑誌を調べてもらつた。その結果私の豫期したよりは意外に少なかつた。明治十九年五月二十五日から六月十一日に至る時事新報に志賀重昂の「南洋巡航日記」があり（二二八四・二二八五・二二八八・二二九一・二二九八・二二九九號）又十二月九日の同紙上

には「日本と濠洲との貿易」なる論文を寄せてゐる。それらは志賀重昂著「南洋時事」に収録されてゐる。その他は何れも明治二十年代のものであつた。そのうちでは香港領事の南貞助といふ人が第二回商工會會員懇親會の席上で「南洋諸島の商況」について演説をしたのを、明治二十年十月八日の「日本の商人」といふ雑誌に載せたのが最も古い。明治二十四・五兩年が最も盛んで、雑誌「日本」を中心として南洋發展の必要が力説されてゐる。

それらの人人のうち、最も注目すべきものが二人ある。一人は福本日南であり、他は稻垣滿次郎である。福本は黒田藩士福本泰風の長男で安政四年の生まれである。後には幾多の史論を著し、又議政壇上にも立つたことがある。その雄健な史筆には相當讀者を牽きつける力があり、その著「元祿快舉錄」「直江山城守」などは大いに江湖の紙價を高からしめたものであつた。だが當時少壯の頃は盛んに圖南の夢をみてゐたのである。かの菅沼貞風と共に、呂宋に入つたのは明治二十二年、彼年三十三歳の時であつた。同年三月同志貞風の客死するに遭ひ「菅沼貞風氏病歿の詳報」なる一文を新聞「日本」に寄せてゐる。間もなく南方より歸來せるものの如く、三宅雪嶺・陸羯南などと「日本」紙上にその達筆を振つてゐた。自ら赤日以南之人と稱してゐた。日南の號はこれを約めたものである。

福本の南方に關する論文その他を年代順に列挙すれば、次ぎの如くである。

この最後の「南洋の大勢」は彼が南方の旅から歸つて、彼の所屬してゐた東方協會で講演した筆記である。東方協會は明治二十五年六月に朝野の名士を以つて組織し、東南洋の事物の研究を目的とした團體である。稲垣はその評議員の一人である。評議員のうちには大井憲太郎・志賀重昂・中橋徳五郎・松方幸次郎・三浦安・肝付兼行・三宅雄二郎・福本誠(日南)等の名もみえてゐる。次ぎに稲垣の南洋論を少しく説明してみよう。

二

にみられたこともあつた。明治二十五年頃南洋方面に遊び、雄大な南方經營論を發表してゐる。それに関し
ては後に詳述する。彼の南方に關する主なる論文をみると、次ぎの如くである。

- 「外務省に殖民局を設くるに就ての國際問題」 「日本」明治二十四年七月十二日
- 「殖民局を海軍省に設置して殖民事業を擴張すべし」 同上 七七六號 同年七月二十日
- 「商工業對外策」 同上 九三九號 明治二十五年一月五日
- 「南洋の大勢」 「東方協會報告」明治二十六年五月

「藻鹽百首」 「日本」明治二十二年五月

「興來錄」 同上 同年五月十一月

「菅沼貞風氏病歿の詳報」 同上 同年八月

「日本及南洋」 「日本人」四四―七號 明治二十三年四月二十七日

「郵船會社亦人あり、眞直行線」 「日本」五九〇號 明治二十三年十二月二十三日

「南邊幾微錄」 同上 明治二十四年二月

「呂宋島カビテ州の記」 同上 同年三月

「排俗論」 同上 六九〇號以下 同年四月二日

「植民及航海」 同上 七一―一號以下 同年四月二十三日

「漢族」(華僑の研究) 同上 八三二號以下 同年九月十四日

「屯海策を講す可し」 同上 九四〇號 明治二十五年一月五日

稲垣滿次郎は肥前平戸の藩士である。文久元年の生まれで、イギリスに留學し、後明治三十年にシャムの
辨理公使として、その外交官生活を始め、明治四十年に特命全權公使としてスペインに駐在し、翌年マドリ
ッドで客死した。三十代の彼は盛んに外交政策を論じ、一般世間からは多少大風呂敷をひろげる山師のやう

あらゆる後進國がさうであるやうに、日本にとつても、先進諸國を模倣することが先づ第一に考へられた。一方國內の生産組織を工場化すると共に、他方外に植民地を獲得することが絶対に必要であると考へられた。だが明治二十年代の日本にとつてその何れも頗る困難なことであつた。殊に後の問題は如何に手近に南洋諸島があるとはいへ、その國力からみて頗る困難なことであつたことは容易に想像し得る。従つてこれらの發展論者が山師ともいはれ、又自らも「圖南の夢」といふやうな題名を附せざるを得なかつたのである。

稻垣が南洋發展を考へたのも、やはり先進諸國の例に倣はんとしたのであつて、従つて彼がその論を進めるに當つても、先づ植民政策から説き出してゐる。彼は植民政策の目的は次第に變遷して來てゐることを説明してゐる。これは明かにイギリスにおける Old colonial policy の没落を説明するものである。古い植民政策は國庫の歳入を増すことだけを目的とした。新植民政策はこれとは違ふ。

「舊其新法と云ふものは何かと云ふと、此度は人口が本國で省ぶき切らぬから、之を外に出さなければならぬ必要が起つて参りました。そこで當時の政治家の政略の方針の執り方と云ふものは、此人口を植附ける所を造るのである。植民地を建てて本國の歳入を増すのではなく、植民地の爲に植民地を建てると云ふので、此植民の新法の第一のハンダメンタル・プリンシプル所謂原則を定めて來た」

この古法と新法との二つの植民政策のうち、未だに古法を採用してゐる地方があるとし、フィリッピン群島・瓜哇・マカオ・交趾支那・ニューカレドニア・臺灣などを舉げてゐる。そして彼は日本の採用すべき植民政策として、古法を退け、新法の採るべきことを主張する。しかし日本は如何なる手段を以つて植民すべきか。それには先づ植民する合理的基礎を考へなければならぬ。彼はある國民が土地を占據する理由として三つを擧げてゐる。(一)物質上の進歩(二)社會上の秩序(三)政治上の秩序これである。この三つを以つて土地を開くことを「シビライゼーション所謂文化を進めると云ふのである」といふ。故に日本は先づその手本を示してみせることが必要である。

「夫れをするには西濠洲の此アルバニーの近傍が最も適當と云ふ私は考へであるのである。何故かと云ふに今の鐵道會社が土地の賣捌の方法もあるし、且つ此アルバニーと云ふ所は歐羅巴洲から参る郵便船の必ず著く所である。夫れで是から三四哩も這入ると今の様な土地があるので、茲に日本の部落を一つ造つて立派に茲で此植民の手本を造つて、歐羅巴洲に往來する人は、此植民地を見に來る位のもの造り上げることは極易いことであらうと思ひます。で此方針を執つて先づ南洋では此植民をやらせる」

他方古い植民政策を採用し、住民を虐待してゐる呂宋・瓜哇・澳門等は所謂三原則に依つて文明の進展を

計るものではないから、これを追拂ふべきであるといふ。要するに彼の南方發展のわが植民政策は

「濠洲大陸には文化の三原則を以て這入るの餘地あり。南洋諸島にては文化の進歩を妨げるものを追拂ふ目的を以て移民政策の方針を執らなければならぬ」

といふのである。彼の議論は極めて樂觀的である。そのいふことは易く、行なふの難きこと明治二十年代の日本としては明かである。

かかる見地から彼は東洋政策上濠洲を重要視し、あらゆる角度から濠洲の状態を説明する。それらの點を今一一紹介する餘裕もなく、必要もないであらう。ただ彼が濠洲と本國との關係を極めて薄弱なものともみ得る一節を紹介するに止めよう。

「英の本國に對する思想、是は外國とは見て居らぬけれども、殆ど外國を視る如し、外交政策上其他の仕事がなつて居るのは、第一に英の本國には各洲エゼントゼネラルと云ふ代表者を出して、先づ云ふと全權公使とも云ふ様なものを出して、さうして此濠洲各州の權利を常に保護して行くことに勉めて居るのでありますが、皆之をやつて居つても本國と此植民地と利害が常に衝突し居る、夫れで濠洲の利益を保

護する爲に彼支那人を逐出して見ると、英の本國が最も市場として貴んで居る所は支那であるから、其花主先を失ふと云ふことで此問題に反對して居る。それで之を一言して見ると濠洲の對外政策の大本は政治上の關係から丁度亞米利加がモンロー・ドクトリンを立てて居る通り、濠洲も矢張りモンロー・ドクトリンを當嵌てやつて居る」

最後に彼は日本の東洋における大方針を説明してゐる。即ち東洋において立てなければならぬ對外策として、第一に商業的對外策、第二に工業的對外策、第三に政治的對外策がある。

第一の點については

「先づ日本を地形上から見、且つ將來鐵道及び航路を立つる點から見て、日本を此地球海洋東西南北七つの航路の中心點として置けば、日本は東洋の間屋たり、而かも尙ほ是を廣うするときは、日本をして所謂世界の問屋たらしむるを要す」

第二の工業的對外策については、これを

「二つに分けて、歐羅巴、亞米利加に對するには何處までも日本の美術品を持つて行くのが此歐羅巴洲に對する所の工業的對外策である、然らば支那朝鮮南洋諸島に對する所の日本の工業的對外策は、彼の十九世紀機械的の製造、所謂羅紗を織るとか、金巾とか、或は紡績、或は製鐵と云ふが如き、十九世紀の機械的能力運動を利用し、以て必用の諸物を造出すと云ふのが、東南洋に對する工業的對外策である」

第三の政治的對外策の大本は

「何の國との同盟を以て北東洋の策を立てむと云ふ様な卑劣な策の立方ではない、吾人の切望する所は他なし、東洋に於ては、日本を獨立すると云ふ所謂フリーハンド即ちどつちにするも、唯此日本の頭の振り次第で東洋の政治が極まると云ふだけの儼然たる獨立の位置を日本が占有するに在り」

かかる見地から彼は太平洋上における英・獨・佛・米・西等の勢力を打破するために、先づ濠洲と連衡してモンロー・ドクトリンを太平洋に適用せよと主張するのである。

「茲に熟ら前途第二十世紀の來勢を考察するに、是れより先き此地中海の時代からま一つ進んで大西洋の

時代となり、此十九世紀から二十世紀になつては、世界の問題は太平洋の問題となることは、東西各國達識卓見の士が皆許して居る、此太平洋の時代に於て、大に奮ふて其太平洋に力を十分に伸ばすには日本一國では行くまいぞ、南太平洋では濠洲がやり、北太平洋では日本が他國に少しも喙を容れさせぬ」

日本は原料を濠洲より受け、日本商品を以つて支那市場を開發する。かかる經濟的見地よりみても、日本は濠洲と結ばねばならぬ。殊にシベリア鐵道は八年の後には出来る。濠洲にとつてもロシアの南下は恐るべきものである。(稻垣は濠洲にとつてロシアの恐るべきことを縷縷説明してゐるが、ここには省略する)故に日本は濠洲と密接に連衡する必要があるといふのである。

三

稻垣滿次郎の議論のうちには多少矛盾はある。日本が儼然たる獨立國として同盟などといふ卑怯なことはしないといひながら、濠洲とは密接に手を取り合へといふ。しかし日清戰役以前の日本において、未だ國內の産業革命すらも極めて不十分な状態にある時、この種の議論が實際家や一般人に採り容れられなかつたことは當然であらう。殊に前にも指摘して置いたやうに、至るところに樂觀的觀察が出てゐる。支那市場におけるイギリス資本主義との競争が未だ資本主義前期の状態にあつた日本にとつて、さう容易なものでないこ

とは明かである。

この種の南洋發展策は單なる南洋經略論より一步進めたものの如く思はれる。そこにはかなり具體的と思はれる政治論がなされてゐる。しかし少しくその根柢を考へると、ロマンチックな南洋經略論と大差なかつたことを知り得る。そこには日本の國力に對する嚴密な批判を缺いてゐる。日清戰役前の日本の軍事的・經濟的實力が如何なる程度のものであつたかを知れば、これらの言説が宙に浮いてゐることが解る。

何故に明治二十年代にこの種の南洋發展論が唱へられたのか。私は未だ當時の論説の大部分を讀んでゐない。従つてすべてのものが同じ傾向をもつてゐたかどうかは知らない。ただ特に二十年代にかうした南洋熱の發生した所以を考へてみようと思ふが、それらの原因を深く追求する餘裕はない。そのいくつかを列挙するに止める。

明治二十年頃までに、わが西洋模倣が一通り終つたために、わが國人の間に一つは西洋模倣に對する反動が起つたこと、他の一つはすでに相當進歩したと速断したこと。例へば明治十七年頃の新聞雜誌の論説に日本産業の顯著なる進歩を論じたものがかなり存する。従つてここに海外發展・植民地獲得に目を向けるやうになつたといへるだらう。然るに支那大陸への發展は支那の地位を高く評價してゐたし、先進國との關係上容易に進出し得ない。織豊時代からの傳統の存する南方に眼を放つに至つたのは自然であらう。殊に郵船會社の南洋航路の開始、商船學校練習船の渡航等が一層これを刺戟したことであらう。

日清戰役後は眼はむしろ常に北方に向けられてゐた。日英同盟と共に何とはなく南方は忘れがちであつた。北から南へ長く横たはる日本列島には昔から北と南との二つの對外問題が存してゐた。今なほこの二つの問題は存してゐる。北方に始まつた支那事變は南へ南へと火の手を擴げていつた。そして遂に大東亞戰爭となつて、人人の注意は南方に注がれた。五十年前の夢であつたことも、今は事實となつて現はれた。南方建設に人人は全力を擧げてゐる。だが日本民族は北方にも問題の存することを忘れてはいけない。

(昭和十七年九月十日)

白罌粟の未熟の莢果から得らるる濃汁は、人をして夢幻の境に彷徨せしむる效力をもつてゐる。これを加工して膏のやうなものとし、紙に塗つて、煙管につめて喫煙する。その主要なる効果は、人間の神経系統に作用し、先づ精神を快くし、うつらうつらと眠らしむるにある。そして、外界の一切の苦痛を忘却してしまふ。脈搏は弱くなり、頭腦の活動は鈍くなる。その間の精神状態の變化はデ・クインシーの「阿片常習者」に詳しい。だが一度、それが常習となればこれを止めることは、生まれ變るよりも、もつと困難であるといふ。阿片中毒者はやがて心身とも衰廢し、社會的活動に耐へられなくなる。

獨立を志さず人人が、涙を流してイギリス人の暴戾と自國の亡狀とを語るのを聞いたこともある。その時から今はすでに十數年を経てゐる。その間多少の反抗運動の話をかぬけはなかつたが、牢固として抜くべからざるアジアにおけるイギリスの勢力は、容易に覆らんとする様子もみえなかつたのである。

大英帝國の威力は遠く東亞の天地まで歴してゐたのである。西方の一小島國に過ぎないイギリスが、どうしてこの偉大なる帝國を建設することに成功したのか。それらを明かにするためには、殆ど近世史全般を語らねばならぬ。私は今それらについて述べんとするのではない。イギリスのアジア侵略の第一歩たる阿片戦争について語り、その結果並びにその影響が東亞に與へた強い印象を述べようと思ふに過ぎない。

二

イギリスの香港侵略史

——阿片戦争始末と當時の日本——

一

一度海路ヨロロッパに遊んだことのある者にとつて、その途次に香港・シンガポール・ペナン・コロンボその他において目撃するアジア民族の屈辱さには忘れられないものがあるであらう。少なくとも心ある者にとつて、西洋人の横暴さは目にあまるものがある。それに對して殆ど奴隸の如く驅使されて甘んじてゐるばかりでなく、むしろ彼等に阿諛追従のみを事としてゐる原住民達の無氣力さには憫れるより外ない。

西洋人のこれら東洋人に對する態度は、單なる先進文明國人の後進國人に對するそれではなく、征服者が被征服者に臨むそれであつた。勿論それらの國國の人と雖も、心ある者は、自國の屈辱を感じないわけではなかつた。私はヨロロッパ留學中にも、それらの國のある人人から、悲憤慷慨の言葉を聞いたことは一、三に止まらなかつた。

あるビルマ人は、イギリスの軍人がビルマの商人の妻を蹴つて、終に死に至らしめたことを語つた。印度

阿片を支那に輸入した最初の者はポルトガル人であるといふが、間もなく支那民衆の多くの者が阿片愛用者となつた。勿論清朝といへども、阿片の害毒の甚だしいことを知らぬのではないから、早くから阿片喫煙の禁令を出し、その輸入を禁止してゐた。

阿片の重要な産地は印度である。印度がイギリスの支配下に置かれるや、イギリス東印度會社は、その阿片專賣權を掌握して、これを盛んに支那に密輸してゐたのであつた。イギリスが阿片を支那に輸入することに依つて、支那人を無氣力・無活動の者たらしめた。

私は、イギリス人が最初からかうした意圖を以つて阿片を支那に密輸してゐたとは思はない。況んや、彼等がランカシャーの綿業にとつて強敵であつた支那農村の家内工業又は手工業の労働者達を生理的に、又道徳的に麻痺せしめんことを意圖して阿片を密輸したとは思はない。人間の全體の行動は、そんなに計畫的なものではない。恐らく、イギリス人は印度産の阿片市場を支那に發見することに依つて多くの經濟的利益を得んとしたのに過ぎないであらう。

だが、イギリス人が、さうした意圖を有すると否とに拘らず、阿片が支那人の多くを怠惰にし、墮落せしめたことは事實である。殊に支那の政府が、これを嚴禁してゐるにも拘らず、密輸を敢てしてゐたことは、明かに不道徳的であり、何ら辯解の餘地はない。況んやこれを發見され破棄されたことを以つて、戦争の口實とするに至つては、勿論言語道斷のことである。利益を得さへすればよいとする商業主義が、その弊害を

最も露骨に現はしたものと云つてよ。

三

阿片戦争は一八三九年、廣東において湖廣總督林則徐が外國商人所有の阿片を沒收し、これを燒却したことに始まる。

元來林則徐は、阿片禁止については、強硬な意見の所有者であつた。これより先、彼は阿片禁輸の旨を詳細に示し、敢て冒す者は嚴罰に處すべき旨を外國商人達に告げた。阿片を輸入する者は、殆どすべてイギリス人であつた。彼はさらに進んで、阿片を密買せる支那商人を處罰し、イギリス商館所有の阿片を全部提供すべき旨を命じ、強壓的に兵力を用ひて沒收した。

その年の六月三日、廣東の埠頭で燒き棄てた阿片は二萬箱以上であつたといふ。さらに阿片輸入の首謀者と見做された外國人十六名を廣東から追放した。そのうち十二名までイギリス人であつた。

林則徐のこの強硬策は、それ自體として、何ら非とすべきものをみない。むしろ當然なすべきことをなしたに過ぎない。僅かに行き過ぎといへば、穏和な外交策に依らずして、彈壓的に出たといふ點であらう。その結果、イギリス人を怒らした。イギリス人といへども、自己の非を知らぬわけではない。阿片沒收の命を受けた時でも、全部ではなかつたにしても、大部分を提出したのも、非が己にあることを知つてゐたからで

あらう。だが、あまりにも強硬に出られたため、却つて己の非を忘れ、相手の暴を責めるに至つたのであらう。悔ゆる泥棒でも擲られれば怒るやうなものである。

だが、この阿片事件は衝突の口火とはなつたが、眞の原因ではない。イギリスの商業的發展が、その國の産業革命を成就し、綿工業等の輕工業は、すでに發展の極度に達し、將に重工業への轉換をみようとする一八四〇年代は、それらの工場に依つて多量に生産される綿布の市場を東亞の天地に求めつつある時であつた。支那をイギリス産製品の市場と化することは目下の必要であり、東印度會社は、その急先鋒であつたのである。

當時、支那がイギリスの實力を知らなかつた如く、イギリスも亦支那の實力を知らなかつた。だが、イギリスが一六三五年に始めて支那に來た時からみれば、すでに二百年あまりの歲月を閲してゐる。この二百年間に、イギリスはヨーロッパ第一の強國に成長したが、支那は依然として吳下の舊阿蒙であつた。イギリスが支那に通商を求めて軍艦を派遣したのは一七四三年、即ち約百年前のことであつた。尊大な支那政府の前には一顧も與へられなかつた。その後百年間イギリスは支那市場の開發のために、幾多の努力を拂つたが、思ふやうな成功を収めることは出来なかつた。しかしその間にイギリスは次第に支那を知り始めてゐた。

イギリスの商人達は、廣東で仲介商人たる公行の手を経て貿易しなければならなかつた。公行制度といふのは康熙五十九年（一七二〇）に廣東商人が組織したもので、外國商人と支那内地商人との間に立つて、媒

介者となり、市價を定め、政府の承認を受けて、貿易を獨占してゐた。當時廣東が唯一の貿易港であつたから、結局外國商人は行商の手を経なければ、支那貿易は出来ないといふことになる。その輸出入税の如きさへも、行商の手を経て收められ、又政府の命令、或ひは外國商人の上奏の如きも、行商の手を経てなされる。政府は外國貿易に關する一切の責任を行商に負はしめんとしたのである。

こんな状態であつたから、支那の中央政府が外國の事情について知るところが頗る少なかつたことは當然である。同時に、相互の理解を困難ならしむることも多かつたらう。支那の方は依然として昔の貢進貿易以上に外國貿易を解してゐなかつたらうが、イギリスの方は、市場開發の急務に依る近世的貿易として發展させる必要に迫られてゐたのである。この兩者の見解の相違は、何時かは破綻を生ぜざるを得なかつたらう。

二つの見解の相違を一致させることは、結局非常に困難である。その見解の背後に存する兩國の傳統の相違が、一層兩者の意見を一致させない。終に阿片事變はその口火を切つたのである。イギリスがこの最も口實にし難い阿片沒收を理由として戦端を開いたのは、最も拙劣なるものであつた。イギリス人自身といへども、これを正堂堂の戦とは思つてゐないのである。彼等がこの不正の戦をさへ敢て辭さなかつたから、支那の市場化はイギリスにとつて必要であつたのである。

その直接の原因の不道德なるにも拘らず、この一戦は、イギリスの東亞における支配力を確立したのであつた。敵を知らず己を計らなかつた支那軍は慘澹たる敗北を喫した。戦況の詳細をここに語る必要はない。近代的武備を有するイギリス軍が徹底的に勝利を得たことはいふまでもない。戦は一八四〇年七月四日、イギリス艦隊の定海要塞の砲撃に始まり、一度は和平の成立をみたが、北京政府の崩壊の變化から、再び戦端の開始となり、終に一八四二年八月二十九日の講和條約となつたのである。

この江寧條約（南京條約）は翌年六月二十六日、香港において批准交換が行なはれた。

阿片戦争は三ヶ年を要した。しかしイギリスは危大な大清帝國のもろさに驚いたことであらう。そして、東亞におけるその勢力の確立に自信と希望とを生じたことであらう。その目標を以つて、イギリスは講和談判に臨んだ。阿片密輸を原因として起つた戦争であるにも拘らず、一言もこれに觸れてゐない。阿片は依然としてイギリス商人の手に依つて輸入されることを黙認せるが如くである。

イギリスは廣東以外に厦門・福州・寧波・上海の開港を要求し、香港島の割譲を求め、それらは條約の第二條・第三條に確認された。さらに「公行」の慣習を撤廃することも約束された。何れもイギリスが支那市場への侵入の基礎を作つたものである。殊に香港島を得て「英國女皇陛下及びその後継者は永久にこれを占有すべく、英國女皇陛下の適當と認むる法律規則を以つてこれを統治すべし」といふことになつた點は注意を要する。

香港は美しい町である。香港といふのは島の名であるが、われわれはその女皇陛下の名をとつてつけたゾクトリアといふ一帯の市街をも香港といつてゐる。次第に高くなつてゐる背後の山に沿ふて建てられた建物から夜夜放つ燈火の列は、殊に香港の夜を美しいものとする。この島を一周するドライブ・ウェイも快的な疾走に適してゐる。この美しい街を作つたのはイギリス人である。それまでは單なる漁村に過ぎなかつた。廻遊道路の側らに昔の漁家の名残りもあつたが、それはいふべきものであつた。

だが、イギリス人は單にここに平和な街を作つただけではない。「イギリス臣民が必要な場合その船舶の損傷を修理し、且これに要する材料を保護すべき港を有するは極めて必要にして且望ましきこと」と記してあるが如く、消極的な意義ばかりでなく、東亞における商業的基地として、又萬一の場合には軍事的據點として、積極的意義をも有してゐたのである。

イギリスがこの地を有してゐたことが、どれだけその東亞における勢力を擴大するのに役に立つたか計り知り得ないものがある。その對岸の九龍を租借し鐵道を布設し、支那内地へ聯絡をつけ、經濟的にはいふまでもなく政治的・軍事的にも、イギリスの勢力下に置くことに役立つた。東亞からヨーロッパに行く要衝を扼して、常に東亞を監視する役にも立つたのである。

かうした南京條約に對して、支那民衆といへども平かであり得ない。外國人に對する反感と自國政府に對する輕侮とは、その後動亂に次ぐに動亂を以つてする有様であつた。有名な洪秀全の太平天國の亂となり、

終には再びイギリスと争を生ずるやうな混乱状態に陥り、ますます外國の權益が擴大さるばかりであつた。洪秀全を滅し得たのは一八六四年の後であつた。かうした動亂状態のうちに、イギリスの支那支配は完成されていつたのである。

五

阿片戦争の起つた一八四〇年は、わが天保十一年家慶將軍の時である。渡邊崋山・高野長英等の蘭學者が筆禍を買つた所謂蠻社事件の翌年である。わが國にあつても、漸く夷船渡來に惱まされ始めた時である。オランダ人の風説書を通じて阿片戦争のこと、その後の動亂のことなど、次ぎ次ぎに報ぜられ、幕政の局に當る者に警告を與へた。

今その風説書の一節を引用してみよう。

「唐國に發り候一揆、當年に至り彌増に相成、エケレス奉行並アメリカのコミサーリスの者事柄を悟り、サンハイ（上海）の方に立去り候、右徒黨の者南京を一旦領し候得ば、是非なき次第に有之」

これは癸丑とある、嘉永六年ペリイが浦賀にやつて來た年である。

「一 分國過半ハ滅し、北京と南との通路を絶切申候、右之時勢は興廢の場に有之、滿洲韃靼の權柄覺束なき勢に有之候

一 市中之富家既に打ち寄り相談し、外國人の助を受んと相計り、其旨北京に申越候事有之候」

これは乙卯安政二年、わが國もすでに假條約を結んだ翌年になるが、かうした情報はオランダからばかりでなく、他の方面からも到來してゐる。嘉永五年朝鮮から得た情報を抄録しよう。

「此程於朝鮮國譯官共之内より通辨役之者迄、及内話候は、近來中國之方騷亂甚敷、其機會は一昨年頃より之事ニ而、最初は盜賊一揆之様子ニ相聞候處、段段長大ニ相成、其根元ハ明代之餘類所所民間ニ相殘居候處、今度先代之恢復を名と致し、岳州、衡州等之邊より起立候之由ニ候」

これは洪秀全の亂を報道したものであるが、支那におけるこれらの内亂の情報、又その以前の阿片戦争の敗北の報告等が、當時の日本人にどういふ影響を與へたか、ほぼ推測することが出來よう。

中にも、支那敗北は當時の人人にとつて意外であつたらう。佐藤信淵でさへも「彼大清國の強大にして密

なほその第一歩としてアジア民族のために祝福すべきであらう。ただその百年以前のことを思ふと、轉た感慨に耐へないものがある。

(昭和十六年十二月二十日)

遜なる、萬一狡猾の王の出ることありて、兼併の志を興さば、其患の大なることただに魯西亞の比すべき者ならんや」といつてゐるくらゐだから、唐崇拝の儒者に教育された當時の一般知識人にとつては大きな驚きであつたらう。

日本海軍が英米兩海軍を撃破した報知に、親英・親米の支那人達の驚いたぐらゐには驚いたかも知れない。と同時に、その支那を破つたイギリスに對し、新しい見方をなし始め、イギリス崇拝の端緒が、この時に始まつたといふことが出来るかも知れない。もしさうだとすれば、イギリスは阿片戦争に依つて、完全に東亞に覇を唱へ得たといつてもよい。幕末におけるわが外交が、それに依つて、支那の覆轍を踏まなかつたといふ利益はあつたかも知れないが、同時に後年「わが英國」と稱する外務大臣を生む速き因由をなしたといへる。

屈辱的な南京條約から約百年を経た。今この一文を認めつつある時(昭和十六年十二月二十日)までには、未だ香港の完全占領の報には接しない。しかしすでに日本軍は香港島に敵前上陸をなし、その殘敵を掃蕩しつつある。

今やイギリスの香港は陥落前夜にある。この文が讀者の眼に觸れる頃には、日本軍の占據するところになつてゐるであらう。イギリス資本主義のコムマッシュリズムが東亞に侵略するその第一據點となつた香港は、新しく更生しなければならぬ。東亞における平和の確立までには未だ多くの苦難の途が残されてゐるが、

シンガポールの經濟的意義

春夏秋冬の四季の變化に恵まれてゐるわれわれの生活から、常夏の國シンガポールの状態を想像することは容易ではない。そこに營まれてゐる人間の生活にはわれわれの想像力を絶するやうなことが、數多く存してゐる。日中屋外は華氏百五十四度から百六十度に上るといふ。雨の降らぬ日は極めて少なく、一年のうち二百七十日も雨が降るといふ。だがそれはわが國における夕立の如く、午後三時頃までに襲來するのみで、一日中降るといふことは殆どない。眞夏のやうな太陽が年中カンカン照してゐるのである。そのシンガポールを目掛けて、わが皇軍はこの極熱の地マライ半島を破竹の勢ひで南下しつつある。シンガポールはマライ半島の最南端にある一つの島である。

第十八世紀の後半、イギリス・フランス兩國の東方侵略の戦場は印度であつた。共に政府の強力なる援助の下に、英佛兩東印度會社は互に鎬をけつた。佛にデュブレあれば、英にクライヴ、ヘスチングスがあつた。これらの人名は邦人の間にもよく知られてゐる。

印度内部の國國の内亂——回教徒と印度教徒との烈しい宗教的争闘は、侵略者にとつて最も好都合であつた。兄弟内に闘ぐ時、外侮りを防ぐことは困難である。だがここにそれらの印度攻略を述べる必要はない。要するに事件はイギリスにとつて有利に展開し、印度全體がやがてその掌中に歸する日が近づきつつあつたことを知ればよい。

イギリス東印度會社はその東洋における貿易市場をさらに東方に求める必要があつた。當然支那がその最も有望な市場と目されたことはいふまでもあるまい。しかし支那市場を開發するためには、先づそこに至る足がかりを獲得しなければならぬ。弱つたとはいへ、オランダの勢力はなほ東方には残存してゐた。マライ半島は支那海の入口に衝り、太平洋へ出る關門である。かつ又マライ群島の自然的中心をなしてゐることは、地圖を開けば何人も看取し得るところである。

イギリス東印度會社は先づこの半島に基地を發見せんと欲した。支那貿易をなす船舶の寄航地とし、薪水食糧の補給地として、又船舶修理のために、最善の港を獲得することを希望した。たまたまマライ沿岸、ダガ地方を熟知してゐたライトといふ船長がゐた。この者に依つて、會社は一七八六年に西部海岸に一つの島を獲得した。それがベナン島である。だがそれは、やや北方に偏在してゐる憾みがあつた。

一八一九年一月二十六日、ファクナル少佐は一隊の兵を引きつれ、翌日ベナン總督サー・トオマス・ラッフルズに會し、巡洋艦インヴェステイゲター及びディスカバリーに乗つて、マラッカを出發した。海峽地

シンガポールに再びやつて来る途中にあつても、イギリス植民地とこの地方の住民達の地域との間の極端な對照が看取される。イギリス人の植民地となつたこの島の状態も以前は本土のそれと同様であつた。その當時は僅かばかりのマライ人の漁夫の家があつたばかりである。それから未だ四十年もたつてゐない。それなのに今やアイル・オブ・ワイトと同じくらの廣さのこの島に十萬の人間がある。森林は切り開かれて、至るところ肉苜蓿と檳榔膏とが栽培されてゐる。町の周圍には丁度魔術のやうに郊外が出来ていく。廣い港にはあらゆる國の船舶が満ちあふれてゐる。それに依つて得る収入は六十萬ルビイを超過し、一八五六年の如きは約二割を増加した。だから今やこの地方の經費を支拂つてあまりあるのみならず、他の海峡植民地と合せて三千八百人の犯罪者を養ひ、又さらに軍事費に十五萬ルビイを提供することが出来る。かかる急激な發展は東印度會社の記録にもないところである。これだけを以つてしても、この土地をもつと高く評價して然るべきであらう。

オリファントはさらにその將來について次ぎのやうにいふ。

シンガポールの將來はその過去の歴史に依つて殆ど禍ひされるところはない。東方における商業市場中、最高の地位を占むることは殆ど疑ひない。が、これを急速に完成せんがためにはその行政が問題となる。すでに印度において採用された制度の如き、國內資源の開発、貿易の擴大に適せず、その完成を阻止された。しかしシンガポールは今まで東印度會社が獲得した他の地方とは事情を全く異にする。ここではアングロ・

帶にさらによき前進基地を得んがためであつた。彼等は最初カリモン諸島を検してみたが、あまり満足し得るものではなかつた。ロス船長の示唆に依つて、シンガポール島へ出かけていつた。そしてそこに彼等は絶好の碇泊場の存することを發見した。

この地はジョーホル王の支配下にあつた。かつてオランダの勢力下にあつたこともあるが、今やさしたる勢力をもつてゐなかつた。イギリスはこの島をジョーホル王から六十萬弗で買収したといふ。かくしてイギリスは東亞への發展の最上の根據地を獲得したのである。最初彼等がこの地を獲得した時、それがイギリスの世界支配に如何に重要なものであつたかを十分認識してはゐなかつたらう。ただ支那貿易に對する一つの足がかりとして、船舶の寄港地として、利用せんとしたに過ぎなかつたらう。だがそれから二十三年の後、一八四二年香港を獲得すると共に、さらに汽船の發達、航海術の進歩するに従つて、さらに濠洲の經濟的必要性が増大するにつれて、シンガポールは次第に最初の目的とは違つた性格をもつやうになつたのである。以下少しくその變遷について述べよう。

二

一八五七年から五九年にかけて三ヶ年、日本及び支那に派遣されたエルヂン伯の秘書ロオレンス・オリファントが當時のシンガポールについて、次ぎのやうに述べてゐる。

サクソン民族の商人階級が日に月に増加しつつあり、加ふるに支那人の移民が住民の大多数を占めてゐる。勿論多少の例外はあるが、マライ群島やフィリッピン群島のどんな産物でも、その生産に必要なものは支那人の労働である。もし、支那人の労働がなかつたならば、マライも、フィリッピンも、シヤムも、印度支那も、その砂糖や錫を輸出出来なかつたらう。先づ砂糖については彼等は唯一の生産者であり、錫については彼等は約八千噸を産出してゐる。さらにシンガポールには土著の民はゐず、しかも二民族の他の一つ、アングロ・サクソン民族は世界における最も勤勉な企業的民族であり、かつより進歩せる統治方法に有能な民族である。もし支那との商業關係が好轉し、そこにヨーロッパ産業の廣汎な市場が出来た時——シヤムとの貿易は最近の條約に依つて樹立され、すでに急激に發展しつつあるが、それがさらに一層擴充された時——ヨーロッパ人支配者の巧妙な統治の下に、ボルネオの大部分の資源がイギリス市場に齎さるる時——マライ半島が勤勉な支那人に依つて満たされ、その重要な價値ある産物を供給する時——これやそれやの原因から、事實東洋の貿易は十倍にも増加するだらうが——その時、シンガポールの重要性を決して高く評價し過ぎなかつたことを知るだらう。

オリファントのこの豫言は確かに的中した。支那人の勤勉な努力を搾取しつつ、住民の無知と怠惰とを利用しつつ、イギリス人の巧妙な統治に依つて、東洋の資源は開發され、ヨーロッパ商品の市場と化した。そしてその間にあつて、シンガポールの繁榮は日に日に増大し、イギリス帝國の東洋支配に最も重要な役割を演ずるに至つたのである。エルチン伯の一行がシンガポールにゐた同じ一八五七年の「タイムス」はシンガポールを「東洋海上における大英國勢力の中心、かつ城塞、さらに大英國と支那との間の大寄航地」と形容してゐる。

イギリスが占據して未だ四十年ならずして、すでにシンガポールは貿易交通の一基地たるのみならず、イギリスの東洋支配の政治的・軍事的重要な基地となりつつあつたのである。さらにその後の急速な世界情勢の進展は、ますますその重要性を増大するのみであつた。

三

シンガポールが東西交通の要衝として、軍事上・經濟上重要であるばかりでなく、香港と同様、大陸内部諸地方の咽喉を扼するものとして、その重要性は一層重大となる。殊にマライ半島内部の諸産業が世界經濟に重要な地位を占めると共に、シンガポール確保の意義は大きくなる。そこで少しくマライ半島の状態について語らなければならない。

通常英領マライといはれてゐた地方は三つの部分から成る。本來の海峽植民地としては、ペナン島とシンガポール島、それに半島においてマラッカ、ウエルズリイ州、ディンディングの三地方だけであるが、シンガポール、ペナン、マラッカと何れも要衝を押さへてゐる。第二の部分は聯合マライ王國で、半島の中央部

を占むる大きな一割である。ネグリ・セムピラン（元來は九王國から成る）セラシゴオル、ペラク及び東部海岸一帯のパーハンなどから成る。第三の部分はマライ保護領で、半島の南と北とに分散してゐる。北の方ではトレンガンヌ、それに從來シャムに隸屬してゐたケランタン、ケダア及びペルリスが一九〇九年に保護領となつた。南方ではシンガポールの直接の背景をなすジョホール王國がこれに屬する。その統治形式にかうした複雑な形態を生んだのは、要するにイギリスがこれらの地方を所謂合法的に獲得した、その巧妙なる手段の結果に外ならない。

マライ半島にはネグリイト、サカイ、プロト・マライなどの原住種族が粗野な原始的な生活をしてゐるが、主要なマライ住民は主として農業を営んでゐた。それらの古い生活の殻はヨーロッパ人の渡來に依つて打破された。このことをイギリス人は次ぎのやうに説明してゐる。

當時この地方一般に農民達に對する極端な抑壓が行なはれてゐた。が、今や何らか生活への望みをもつやうになつた。最早彼等は奴隸ではない。彼等は個個に土地を所有し富有になりつつある。眞のマライが目ざめつつある。生き甲斐のある生活が歴史始まつて以來初めて與へられた。租税収入はこの國の利益のために費されてゐる。道路と鐵道の發達がすべてに効果を擧げ、よりよき市場が開かれ、新しい職業が與へられつつある。マライは今やその錫とゴムとを以つて世界における有用な土地となり、シンガポールは世界最大の開港場の一つとなつた。このマライの發展は、その變化の迅速さと企業の成功との二つの點において、イギ

リス商人及び移住者、並びに一八七〇年後の行政官の最も著しい業績の一つであると。

この言は必ずしも事實を誣るものではない。だが、かかる業績が如何なる犠牲の下になされたかを注意しなければならぬ。イギリス人の進出に依つてマライ住民の生活は彼等のいふが如く幸福となつたらうか。生甲斐ある生活を與へられたらうか。マライの貴族達の生活がイギリス人に依つて監視され、束縛されたことはいふまでもないが、以前奴隸のやうな生活に甘んじてゐたといふ農民の生活も果たして幸福になつたらうか。そこに多くの疑問がある。

マライの開發はマライ人の手に依つて行なはれたものではなかつた。外國人の勞働に依り、外國の資本に依つて完成されたのである。すでに一九一一年に支那人の數はマライ人を超過してゐる。即ちマライ人その他の住民四十二萬八百四十人に對し、支那人四十三萬三千二百四十四人となつてゐる。しかしその後マライ人が増加し、支那人よりも少し多くなつた。支那人に次いで印度人の移住が多く、一九一一年には十七萬二千四百六十五人であつたが、一九二一年には三十萬五千二百九十九人となつてゐる。マライはその點においては支那人と印度人との移住地であるといつてよい。

それらの外國人の多くは、マライ開發の勞力の提供者である。それらの勞力を使用してマライを開發せしめた資本の多くは、イギリス資本であることはいふまでもない。第一次世界大戰直前の投資額をみると、二千七百二十九萬三千磅に上つてゐる。勿論これをイギリスの植民地投資の全額から見れば、必ずしも大では

ないが、殆ど近代的産業の發展してゐない——シンガポールにおける錫製錬工場やパイナップル罐詰工場などを別として——この地方への投資としては相當大なるものといはなければなるまい。

それらの資本の力が明かに支那人・印度人の勞力を使役して、莫大の利潤を擧げてゐたことは認められよう。マライの住民が、それに依つて、どれだけの餘徳を得たらうか。シンガポールに行きずりに上陸した旅行者の目にも、昔とあまり變らぬやうな住民達の小屋、その生活ぶりはイギリス人達の豪奢ぶりと比較して、あまりに甚だし過ぎることが認められよう。又、住民達の卑屈な態度と英人達の高慢不遜の態度とをみれば、彼等が同胞の主人の代りに、外國人の主人を迎へたに過ぎないといつても過言ではなからう。マライは確かに開發された。しかし「眞のマライ」が目ざめたとはいへない。

かかるマライが世界市場に重要な地位を占め、従つてシンガポールが單なる交通の要衝といふに止まらなくなつたのは何が故か。それは東方支配の要衝だからである。シンガポールを支配する者はアジアを支配するといはれる。それはその軍事的重要性からみた言葉ではあるが、さらにその背後にあるマライのゴム生産が、自轉車・自動車の發達と共に、今日の文化的生活並びに軍備に頗る重要なものとなつて來たことをも考慮に入れなければなるまい。

砂糖・珈琲・ココナットの生産に始まつたマライの農業は、やがてゴムの生産に依つて取つて代られた。一八八〇年代にあつては、未だベラクヤシンガポールの政府の栽培園でその増殖に成功した程度であつたが、

九十年代の末には、すでに新産業としての基礎を確立してゐた。しかし一九〇五年には僅かに一噸のゴムを輸出したに過ぎなかつたが、一九〇七年には八百八十五噸に、一九一七年には七萬九千八百三十一噸に増加し、一九二一年には世界のゴム産額の半ば以上がマライから産出せられるやうになつた。わが國が支那事變以後、ゴムの輸入が少なく、かなりの不自由を感じたことは、すでにわれわれの経験するところである。

今や皇軍はマライ半島を南下してシンガポールを指顧して語る地點に達してゐる（昭和十七年一月二十五日）。聞くところに依れば、マライの住民達は皇軍の進撃に協力してゐるといふ。このことはイギリス軍當局も自ら承認し、土著人の援助が日本軍の行動を有利にしてゐると呟つてゐる。この事實は何を意味するか。マライ人を以つて忘恩の徒とのみいふことは出来まい。イギリスの統治は確かに成功した。だが同時に失敗した。何が故に成功し、何が故に失敗したか。マライ全土が皇軍の威力に屈服する日は恐らく遠くはあまい。だがわが國としてなすべき事業はむしろその後にある。土著の國王の専制に代るに、イギリス商人の壓制を以つてしたのに、さらにそれに代るべき同じやうな壓迫を以つてしたのでは意義がない。

複雑なマライ諸國を、その現在の複雑な人種——マライは世界の人種の展覽場だとさへいふ——その關係を如何に導くか。そこには幾多の困難な問題の存することを認めなければなるまい。現在の世界がわれわれ日本人に求めてゐるところのものが頗る多く、頗る困難なものであることを、日本人たる者は十分に自覺しなければならぬ。覆轍を踏むことは嚴にこれを戒むべきである。

（昭和十七年一月二十五日）

印度經濟論

一

今や印度はイギリスの支配から離脱せんとし、血みどろの努力を續けてゐる。西歐資本主義の東漸に依つて、古い傳統的な社會秩序が破壊され、新しき物質的基礎に立つ社會秩序の建設を必要とした點において、印度は他のアジア諸國と何ら異なるところはなかつた。このことが又主として、西歐先進國の指導の下になされたことも同様であるが、その指導の形態において最も悲惨な、壓倒的手段が採用されたのは印度である。しかも印度は他の南洋諸島の諸民族とは異なり、古い數千年來の傳統を有し、光輝ある文化の誇りをもつ民族である。それにも拘らず西洋文明の壓倒的勢力はこれらの誇りすら影うすきものとなり、強力なるアングロ・サクソンの武力の前に屈從し、唯唯諾諾としてその命を甘受せざるを得ない状態に陥つたのである。しかし古い傳統は如斯く容易に打破し得るものではない。

勿論印度も亦支那に似て、常に他民族に依つて征服されてゐる。かのドラヴィダ族が原住民を追ふて、この地に占居したのは、何時頃のことか明白ではないが、アリアン民族がインダス河流域の低地に移住し、漸

次にドラヴィダ族を驅逐したのは、紀元前二千年頃のことであるといふ。その頃からすでに印度は諸民族の注目するものとなつてゐた。アリアン民族に次いで回教徒の侵略があり、そこに複雑な印度の民族關係・宗教關係を生む素因を作つたのである。しかしこれらの民族の支配とアングロ・サクソン民族の近世的支配との間には本質的相違がある。他の民族は印度のうちに生活し、同化し、そこに印度文化を生んだのであるが、アングロ・サクソン民族は印度の外に生活し、印度文化とは全く違つた文化を強制せんとするものである。この點にイギリスの統治の弱點があるといふことが出来よう。永い傳統を有する文化は、常に外部から違つた文化の影響をうけて育つと共に、やがてこれを同化して、その民族特有の文化形成に役立てつつ成長するものである。勿論今日の印度にみるが如く、印度教と回教との信仰的對立を永く殘存せしむることはあつても、それらの人人の生活は印度的なものに融合される。イギリスに依つてなされた西歐文化の移植が、果たして印度人の生活にどの程度まで入り込むことが出来たらうか。

イギリスの印度における任務は、一方舊來のアジア的社會秩序を打破する破壊的使命であり、他方西歐の社會秩序の物質的前提を創造する建設的使命であるといふ。そしてそれらの使命はある意味において果たされたといふことが出来よう。假令それが全印度國民の鮮血を犠牲としたものであつても、又古い社會秩序を抑壓して創られたものであつたとしても、とにかく資本主義的生産機構は印度においても成長しつつあつた。ただそれはイギリス人に依つて外部から移植されたものであつて、印度人の手に依つて印度の地に育て上げ

られたものではなかつた。

凡そある民族の眞の發展は、假令それが外部からの影響に基づくものであつても、その民族自身の強い創造力を基礎とするものでなければならぬ。イギリスがイギリスの立場からみれば、明かにその二つの使命を果たしたといへよう。しかし印度自身の立場よりこれをみれば、未だ少しも果たしてゐないといつてもよからう。印度における古い社會的秩序は多くの印度人に依つて支持されてゐる。印度の資本主義化は大多數の印度人自身の生活とは別個に行なはれてゐるに過ぎない。ある民族が古い社會秩序から新しい社會秩序に移行するためには、このやうな水と油との如き状態に置かれてゐてはならない。新しい秩序は古い秩序と無關係のものではない。古い秩序のうちに存するあるものが、新しい情勢と矛盾を生じた場合、その矛盾を克服することに依つて新しい秩序を創造するのである。その意味において假令同じく資本主義と呼ばれてゐても、各個の資本主義は決して同一のものではあり得ない。假令先進國の施設を文字通り模倣した場合でも、もしその民族の生活力が強ければ、その結果はそれらを攝取すると共に新しい文化の創造へと發展すべき筈である。その意味で印度は未だ古い社會秩序を破壊し、新しい社會秩序を創設したとはいへないのである。

印度の如き古い文化をもつ民族がいつまでもかかる状態に甘んじてゐるとは考へられない。印度の古い精神的文化がイギリスの移植した物質的文化と正面衝突を來たすことは極めて明瞭であり、印度民族がイギリスの強力な壓迫を蒙れば、それがその國民主義となつて表現されることは極めて當然なことであらう。われ

われはそこにかのラビンドラナット・タゴールの藝術と哲學の意義を想起せざるを得ない。「印度經濟學」の著者がその序文に印度經濟學を「印度の國民的見地よりする現在の印度の經濟的地位の研究」と定義して *and* (Professors Jathar and Beri, Indian Economics, A Comprehensive and Critical Survey of the Economic Problems of India, 2 vols. 1931.) せうした國民主義的要求から現はれたものとみることが出来よう。事實第一次世界大戰に依つて印度の國民的自覺は著しく高められた。印度獨特の金融制度としての *hundi* の研究の如きが、印度學者の手に採り上げられるに至つたことも注目すべきであらう。だが未だ實際の印度の經濟生活が印度人の手に依つて營まれんとする境遇には到達してゐない。何故に印度經濟が實質において印度的になることが出来ないのか。西歐文化を古い印度文化に攝取して、さらに新しき印度文化を建設することは不可能なのであるか。

私は今これらの問題に對して周到な検討をなす用意を缺いてゐる。私は昭和八年に隨想的論文として「印度論」一篇を草したことがある(拙著「むかしと今と」)。その後とても多少とも印度について注意を拂つてはゐるものの、未だ全面的に印度研究に従事する機會を得ないでゐる。従つて今上述の問題に對しても十分な研究を發表し得ない。ただ需めらるるままに印度經濟に關する管見を述べんとするに過ぎない。その不完全なことは筆者の熟知するところである。従つてこれを研究論文といふよりも、一家言として讀んで戴ければ、筆者の幸甚とするところである。要するにイギリスの支配下にある印度經濟の一面について概括的批判をな

さんとするに過ぎない。

二

印度は世界における有数なる貿易國であり、かつ又八大工業國の一つであるといふ。印度の貿易額は世界において第六位にあり、一九三九—四〇年にあつては、輸入総額十六億八千九百萬ルビイ、輸出総額二十一億五千萬ルビイで、四億七千萬ルビイの輸出超過を示してゐる。印度は常に輸出超過であつた。だが少しくこの貿易の内容についてみれば、それは工業國といふよりも、むしろ農業國の状態にあるといつてよい。即ちその主要輸出品をみれば、棉花を筆頭として、紅茶・ヂェト・ガニイクロス・ガニイバック・落花生・綿布・小麦・山羊の皮・亞麻仁・羊毛・牛皮（鞣）・油粕・ラック等であり、工業製品として輸出されるものは、勿論年に依つて多少の差違はあるが、全輸出額の二割前後に過ぎないのである。しかし印度における綿布工業の如きは相當發達してゐる。

勿論印度工場的發展は最近三・四十年來のことに屬する。そのうち最も發展したのは纖維工業で、ヂェトと綿布とである。一八九二年には纖維工業に使用さるる労働者数は僅か十七萬人に過ぎなかつたが、一九三二年には七十萬人を算へてゐる。少しく統計は古いが、一九三〇—一年における印度綿布の全生産額は二十五億六千百萬ヤードに達してゐるが、そのうち輸出されたものは二十六分の一の九千八百萬ヤードに過ぎな

い。しかも印度は毎年イギリス本國から巨額の綿布を輸入してゐる。即ち印度産綿布の大部分は三億六千萬の人口を有する印度市場において消化されてしまふものとみて差支へない。

印度工業の問題を述べるに先立つて、少しく印度の財政問題を検討する必要がある。

前述の如く印度はその貿易に關する限りにおいては輸出超過國である。その限りにおいては金の流入をみる筈であるが、印度は常に巨額の負債に苦しめられてゐることを注意しなければならない。しかもその負債は殆ど永久に返済し得ないやうな状態になつてゐる。

印度の負債額がどの程度に達してゐるか、精密なことはこれを知り得ないが、又その計算も人に依つてかなりの相違があり、さらに貨幣價値の變動に依つて一概にはいはれないが、大體十億磅とみてよいであらう。その内譯は大體下記の如くである。

(一) 磅公債及び鐵道債	四〇〇
(二) 都市港灣借入金	一〇〇
(三) 印度にて登録せる會社投資	一〇〇
(四) 印度外にて登録せる會社投資	二〇〇
(五) ルビイ債券への投資	一五〇
(六) その他の投資	一四〇

この評價は一九二九年についてなされたものであるが、その後においてもこれより増加することはあつても、減退することはなかつたらう。さらにこれ以外に所謂“Home Charges”といはれてゐる負擔が印度に課せられてゐるのである。

前述の如く従來印度を征服せるものは、アリアン人にしても、ギリシア人にしても、アフガニスタン人にしても、又モガアル人にしても、何れも印度に定住し、印度人と同化してしまつたのであるが、イギリス人は印度に定住することなく、印度人化することもなかつた。従つてここに初期の征服者にとつては問題とならなう新しい經濟問題を惹起したのである。例へば印度におけるイギリス人官吏及び軍人は一定の年限を勤めれば本國に歸る。彼等及びその家族は印度から得る年金で生活するが如きである。勿論理論からいへば、彼等は印度のために盡したのであるから、印度がこれに酬めるところあるのは當然であるかも知れない。しかし、それが夥しい數に上るに至つては、印度人としては注目せざるを得ないのである。この外に“Home Charges”としては、同じ理由からロンドンにおける印度事務局(the India Office)の費用も負擔させられてゐる。勿論印度事務局の費用のうちには、直接印度の生産に役立つものもなくてはならないが、大部分はイギリス人官吏への奉仕に過ぎない。この“Home Charges”と呼ばれる印度の負擔は大體四億ルビイになり、ほぼ印度における土地収益として農民から取り立てるものの全額に相當するといふ。ただこのうち一億七千

萬ルビイは印度への投資となり、前述の十億磅のうちに加算されてゐるから、結局純粹の負擔額は二億三千万ルビイである。これに十億磅に對する利子支拂額を加へれば、總額凡そ十億三千万ルビイを印度は年年負擔しなければならぬことになる。この外に船舶運賃・保険料等の負擔があるわけであるが、暫くこれは論外に置く。

かかる巨額の負擔をもつ印度は假令貿易上有利な地位に立ち、輸出超過であつたとしても、なほ多くの不足をみる。一九二〇年から一九三〇年に至る十ヶ年における平均輸出超過額をみると、一年二億六千万ルビイに過ぎない。假りに前掲一九三九—四〇年度の四億七千万ルビイをとつたとしても、一年の負擔額の消却には、なほ五億六千万ルビイだけ不足する。さらに土地から得らるる収益を四億ルビイとするも、なほ一億六千万ルビイの不足をみる。換言すれば、印度がその國民經濟を最大限度に利用しても、現在の状態のままでは、その負債額を返済し得ないのみならず、ますます増加するより外にないといふことになる。かつその“Home Charges”も年年増大の一途をみるのみであるから、印度人自身の生活は一向に改善されないことになる。即ち印度人は自己の生活を犠牲に供することに依つて、イギリス人に奉仕せざるを得ないのである。さらにこれを他の方面から少しく検討してみよう。

印度は自然に恵まれた國である。その肥沃な土地と多くの労働力を十分に生産的に働かせれば、上述の巨額の負擔も必ずしも返済出来ないものではない。従つて問題は國內生産資源が十分に利用されてゐるかどうかにある。この點においてはイギリスの印度政策も同様の方向に向つてゐることは認められる。ただその目的が印度人のための政策ではなくして、イギリス人のための政策であるために、著しく異なつた結果を生ぜざるを得ない。

所謂「印度的低賃銀」として知られてゐる印度の工場労働について少しく調べてみる必要がある。印度における完全な賃銀統計のないことは有名なことである。今ラオ教授の個人的調査に依つて少しく考察してみよう。(V. K. R. V. Rao, *Earnings of Workers in Large Industrial Establishments in British India*, *The Economic Journal*, vol. XLVII, No. 185, 1937) 勿論それは八千四百四十三通の質問狀に對して僅かに百十三通の答信が利用し得られたものに過ぎなかつたのであり、決して満足なものではないが、かつ又その答も依據し得るものかどうか疑問ではあるが、一端を擧げて全貌を知ること出来よう。

ラオ教授の算定に従ふと、百人以下(一人から九十九人まで)の労働者を使用する工場においては年收平均二百六十六ルピー、百人以上千人以下の工場においては二百八十八ルピー、千人以上の工場においては二百七十八ルピーとなり、全工業労働者の平均賃銀は二百六十四ルピーとなる。

さらにこれを工場の種類に依つて區別してみると、繊維工場においては二百三十三ルピー、機械工場にお

いては四百三十一ルピー、金屬工場においては四百八十五ルピー、飲食品及び煙草工場においては百五十五ルピー、化學及び染料工場においては二百三十五ルピー、製紙及び印刷工場においては三百七十五ルピー、木材、石材及び硝子材工場においては二百二十三ルピー、繅綿・壓縮工場においては百四十四ルピー、その他雜二百九十六ルピーとなつてゐる。金屬工場の四百八十五ルピーを最高とし、飲食品及び煙草工場の百五十五ルピーを最低とする。これに従へば最高の報酬を得らるる工場においても月收平均四十ルピーあまりに過ぎず、日給にすれば一・三二ルピーである。最低のものに至れば月平均九ルピーに足らず、日給〇・三ルピーに満たない。貨幣價値の著しく變化してゐる今日、これを日本貨に換算することは無意義であるが、何らかの概念を得るために、假りに一ルピーを六十五錢とすると、賃銀の安い工場においては月收五圓八十五錢以下、日給十九錢五厘以下といふことになる。しかもこれは平均數であるから、それ以下の賃銀の者が多數存してゐるわけである。彼等がその收入の九割前後を食料に費してゐるといふのも怪しむに足りない。殊にもし上述の質問狀に對して、何らの解答をも與へなかつた諸工場の多くが、甚だしき低賃銀を給與してゐるが故に答へ得なかつたと疑ふならば、これらの數字はさらに低下すべきものではなかつたらうか。

だが他方印度の賃銀——殊に綿工業の賃銀は日本の賃銀と大差ないといふ議論がある。前述の數字に従へば繊維工業の平均賃銀は年二百三十三ルピーである。當時(一九三〇年頃)ルピーは一シリング六ペンスに定められてゐたから、前述の六十五錢より高くつく。加ふるに圓貨の對外價値は下落してゐたから、ルピー

の對外價値は圓よりも著しく高かつたことは事實である。従つて一ルビイ六十五錢として、年收百五十一圓四十五錢、月收十二圓六十二錢、日給四十二錢よりも遙かに高かつたことは疑ひない。しかしここで問題とさるべき點は貨幣の對外價値ではなくして、對内價値でなければならぬ。

故に印度の織維工業の賃銀が、日本のそれと貨幣價値においてほぼ等しいとしてゐる論者にしても、なほ日本の生活費は低く、低賃銀であるにも拘らず、労働階級の家庭が小額ながら貯蓄をしてゐることを指摘し、何れにしても日本の労働者の方が印度の労働者よりも遙かによい生活をしてゐることを認めてゐる。(Vakil and Maluste, Commercial Relations between India and Japan, pp. 163—5) 生活費が安くてすむと云ふことには二つの意味がある。一つは日本の労働者の生活の方が印度の労働者の生活よりも單純で程度が低い場合であり、他の一つは日本の物價が安い、換言すれば圓價の國內購買力が高い場合である。もし日本の労働者が印度の労働者よりもよい生活をしてゐるとする斷定が正しいとすれば、後の場合とみるより外にない。圓の對外價値は低くとも對内價値が高ければ、その賃銀は決して低賃銀とはいひ得ない。前にも述べたやうに單に貨幣額を比較しても、何らの意味もないことは明かである。ルビイの國內購買力の低い場合、上述の如き賃銀は辛うじて労働者の生活を維持し得るに過ぎない。

加ふるに印度においては、これら労働者に対する厚生の諸事業——社會保險・教育・醫藥・娯樂等について、殆ど何らみるべき施設もない。イギリスの資本家は印度人労働者の生活状態について無關心であつた。

低廉な賃銀で雇用し得る者を求めた。その技術や教育に關しては何らの注意をも拂はなかつた。彼等は印度古來の織物業に熟達してゐる人人から採用しようとも試みなかつた。彼等は工場を立てるに際しても、運輸の便のよい地方を選び、労働人口を問題としなかつた。カルカッタやボムベが最初に選ばれたのも、單にそれらの地方が運輸に最も適した港だつたからである。その後アーメダバッド・ショラブール・ストラト等に綿業が發展した際も、少しも労働人口を顧慮せずして工場を設置した。そして附近の村落から得られる不熟練工を安い賃銀で獲得したのであつて、ピラスブリスやチャマルスなどにあるジャングル型の土人ともいふべき程度の者を使用したのであつた。

このことは明かに印度綿業に悪い影響を與へると共に、イギリス人の工場經營の本質を物語るものであつた。殊に綿業の如き印度における古い傳統を有する職業において、古いものと何ら聯關なく始められることは決して當を得たものではない。勿論イギリスが印度において勢力を得始めた頃には、かうではなかつた。かの東印度會社の如きはイギリスから織工を派遣してヨーロッパ向の織物を製作するやうに印度人織工を改良せんとしたくわであつた。しかし産業革命後ランカンチャ綿業の發展と共に、印度人織工の運命などは勿論問題でなく、さらに印度自體に織物・紡績工場が發展するやうになつても、最早印度人のことを顧慮しなかつたのである。その工場における保健・慰安・住宅等の設備は勿論少しも考へず、ただ常に労働の補充さへ行なはれてゐればよいとした。その結果、一方工場自體の労働能率も低く、職工の質も劣悪であつたは

かりでなく、他方印度の村落生活に非常に悪い影響を與へたのであつた。

勿論この問題は日本綿布の印度進出と共に一部の論者や資本家の間に考へ直されて來たことは事實である。従つてある工場では労働者に對する施設を考慮するやうになつたことは認められる。例へばマドラスにおけるビンニイ會社、ジャムシェプウルにおけるタタ鋼鐵工場、ナグプウルにおけるエムプレス工場などの如きがそれである。だがそれはむしろ例外といふべきで、印度における工場労働の問題は依然として改善されてゐない。殊にイギリス本國における競争者との關係上、一層工場改革は阻止され、印度の産業的發展は不十分ならざるを得ないのである。

四

次に農村の状態について述ぶべきであらう。驚くべき貧しい民衆の群れてゐるのが印度の農村である。四億に近い人口の大部分が農民である。彼等は昔ながらの少しも進歩しない耕作法をそのまま續けてゐる。古い傳統や慣習がそのままに持續されてゐる。彼等の出生率も高いが、死亡率も高い。衛生設備の缺如と迷信の流行とは疫病・飢饉と相俟つて多くの増加を妨げてゐる。その上殆どすべての農民が生涯借金で苦しめられてゐる。多くは村の高利貸の融通を受けてゐるのであるが、その利率は三割七歩五厘といふ高率であるといふことである。

印度における地主階級はかうした農村の寄生的存在であつた。彼等は耕作法の改善とか灌漑などといふことは少しも考へない。ただ農村から搾取することを計つてゐた。土地の生産物に對する地主の割前はしばしば小作人の三倍に相當したといふ。

従つてかかる印度農民の窮乏は必ずしもイギリスの支配にのみ歸することは正しくないであらう。しかしかうした窮乏に對して印度政廳は何をなしたか。自由放任主義を奉じてゐた初期については敢ていふまでもあるまい。印度民衆の驚くべき無知と窮乏とに國家の社會的施設の必要を認めるやうになつたのは、今世紀になつてからである。だがそれらにしても極めて不十分なものであり、一般大衆の生活改善に殆ど何らの効果をも齎さなかつたといつてよい。却つて漸次に重くなつた課税が、殊に農民をしてますます窮乏の度を高からしむるに過ぎなかつたのである。イギリスが印度民衆から搾取したところは、到底僅かな施設を以つて償ひ得るものではなかつたのである。

しかしそれにも拘らずこの印度民衆の窮乏の原因をイギリス支配にのみ歸し得ないのである。貴族層と民衆との貧富の差の甚だしかつたことは昔からの現象であり、農民がしばしば饑饉に襲はれ、その子弟を奴隸に賣つたり、餓死したりすることも、今に始まつたことではない。農村壓迫も昔から存してゐた現象である。ただそれらを改善せんとする意圖を十分に行なはず、むしろ印度農民のさうした状態をよしとして利用した點にイギリスの罪はあらう。安價な労働の供給地として、又武力の前に容易に屈從する奴隸的存在として、

これらの地方状態を持續する方がイギリスにとって都合がよかつたのであらう。

だが世界の情勢の變化すると共に印度も亦變化せざるを得なかつた。第一次世界大戰後における大不況時代は印度にも影響を與へざるを得なかつたのである。農村の疲弊・貿易の衰退・競争國の進出等が印度經濟の行詰りとして顯著に現はれて來た。それと共に印度のイギリスからの離脱がイギリス人を焦慮させた。實際印度はイギリスにとって不可欠の市場となつてゐた。一九三九—四〇年度の英印貿易をみても解る。印度への輸入は七億一千九百萬ルピーであるのに、イギリスへの輸出は僅かに四億一千六百萬ルピーで、三億以上も印度は輸入超過である。その外前述の貿易外収入にしても、その大部分はイギリスの手にはいるのであるから、イギリスにとつて印度が如何に大なる財源であるかは容易に想像し得るところである。従つてイギリスとしてはどこまでも印度を自己の手に確保して、イギリス帝國の重要な一環として置きたいのである。

マドラス大學のトォマス (Parakunnel J. Thomas) が「世界不況下の印度」と題する一文で (The Economic Journal, Vol. XLV, No. 179) 印度經濟の發展策を論じてゐる。それに従へば (一) 印度商工業の保護 (二) 借財、地代及び土地收入の救濟の二項目を擧げてゐる。さらに第一の印度商工業保護政策として (1) 不當なる外國の競争に對し印度工業及び農業を保護すること (2) 印度の輸出貿易を擁護するために印度品の二大輸入國と協定を結ぶこと (3) 生産及び輸出を制限せんと努めてゐるある種の生産者に對して政府は積極的援助を與ふること (4) 印度の生産物の品質及び品等を改善するため、並びによりよき販賣方法を適用

するために組織的努力がなされるべきこと等を指摘してゐる。

印度の經濟状態を改善せんために、土地及び商業の兩方面に觀點が向けられることは當然である。しかしもしこれを實行すれば、當然印度は完全に資本主義化されなければならず、自ら先進國たるイギリスと常に利害が一致するといふことは困難である。トォマスのいふ印度の二大輸入國とは日本と北米合衆國とを指すであらうが、結局日本が最も著しい對象とされたことは世人の記憶に新しいことであらう。その協定は實際には印度のためといふよりも、イギリスとの關聯において印度貿易を考慮したに過ぎない。従つて直接印度經濟そのものにどれだけの効果があつたかは疑問である。

印度經濟の改善は又印度人の生活程度そのもの向上を惹起することにならう。トォマスは印度の保護貿易政策と國內の生活水準の向上とを將來の二大目標としてゐる。そして印度の生活程度の上進は印度自體の工業及び農業製品の増大のみならず、西洋諸國の産物に對する消費の擴大となるといひ、印度大衆の生活水準の固定的に低いことがイギリス高級品の印度における消費を如何に妨げてゐるかを記憶せよといつてゐる。勿論これは一部の眞理を示してゐる。印度に全般的な産業革命が行なはれ、資本主義化を完成し、一般の購買力が増大すれば、明かにイギリスの高級製品の消費は増大するだらう。しかし同時に印度産業の發展は、それと競争的地位にあるイギリス商品を印度市場から驅逐せざるを得ないだらう。殊にランカンチャアの綿業の如きは最も問題とならう。ここにも印度がイギリス人のための印度か、印度人のための印度かといふ根本

的問題を解決しない限り、何時までも決定し得ない問題が存する。

五

以上の概観に依つても印度經濟の根本的解決は、結局經濟方面のみを以つてしては到達し得ないことが推測されよう。今次大戰の始まる直前まで、イギリスの雜誌その他に印度金融の問題が盛んに論ぜられてゐた。印度財政の逼迫を解決せんとする努力から當然のことであつた。しかし一部にはルビイ貨の健全性から樂觀もあつたやうであるが、それでは根本的に解決することは出来ない。印度の年年に増大する負擔は絶えず印度民衆を最低水準に抑壓し、それを基礎とする現在の印度産業は健全な國民經濟の發展とはならない。イギリスは舊來のアジヤ的社會秩序を打破した。しかし徹底的に破壊したのではない。むしろ悪く變形したに過ぎない。イギリス流の分割して統治する政策は、この點にも現はれてゐるといへよう。イギリスとしては當然なことかも知れないが、その印度統治政策は常にイギリス中心であり、イギリスのための印度であつた。この點においてイギリスを非難する學者は勿論少なしとしない。元慶應義塾大學に教鞭をとつてゐたブキヤナン教授 (D. H. Buchanan) はその著「印度における資本家企業の發展」(The Development of Capitalist Enterprise in India, 1934) のうちで近世民主主義の見地から——又確かにモンロー的倫理觀念から——イギリスの印度支配に非難の言葉を述べてゐる。イギリス人の印度における行動は、一個人又は一國

民の利己心に基づいてなされてゐるといふ點は、恐らく何人も承認せざるを得ないであらう。印度人のための印度とは全く異なる植民地的色彩の濃厚なものとならざるを得ない。この意味においてはイギリスは印度に何ら新しい社會秩序を創造したものでなく、又古いアジヤ的社會秩序を根本から破壊したものでない。すべての後進國と同様に、印度が印度自身の新しき社會秩序を創設するためには、先づ強力なる政治形式を完成しなければならない。それは外から與へらるべきものではなく、印度人自身の努力に依つて構成されなければならない。この點については私は國民會議派に期待するところ大である。そして先づ貧窮村落の弊害を除去すべきである。そのためにはどうしても眞の經濟的發展に大なる重壓を加へてゐるイギリスの勢力を除去することが第一に必要なである。

しかし單にイギリス勢力の撤退だけで、直ちに印度が完全に國民的發展をなし得ると考へてはならない。回教徒と印度教徒との宗教的對立は暫く置くとしても、印度内部の國民的統一にはなほ幾多の困難がある。二十年ばかり以前、私が滯歐中知り合つた印度人のうちに二種あつた。一つはイギリス人の印度における横暴壓制に涙を流して悲憤慷慨する人人であり、他はむしろイギリス人の印度に移植した西洋文明に感謝の念をもつてゐる人人であつた。印度が眞の印度國民經濟を樹立するためには、國內におけるあらゆる對立を克服しなければならぬ。少なくとも對外的には一致協力する必要があるであらう。そこには印度の國內事情が單純でないだけに無数の困難が存してゐる。

さらに又印度が新しく創造すべき社會秩序は單に歐米資本主義の外形的模倣であつてはならない。さればとて又古い印度傳統の單なる復活であつてもならない。古い印度精神に目ざめることは必要であるが、それに附隨した過去の多くの缺陷は十分にこれを除去すべきであらう。即ち古き傳統に生きる印度は、その古の精神に基づき、新しき社會秩序を生み出さなければならぬ。これも亦いふに易くして、行なふに難きことである。

だが私は昔の印度文化の發展を考へれば、印度民族にとつてそれらは極めて困難なことであるかも知れないが、不可能なことではないと思ふ。今日の印度における排英運動が如何なる形態を以つて終結するかは容易に豫斷し得ないところであるが、何時かは印度は印度人の手に歸るべきである。過去二世紀に近い間、印度の歴史は印度人以外の者に依つて創られた。印度人自身が印度史に再び活躍し始めたのはここ二・三十年來のことである。私は印度人の手に依つて創られる印度の成長を刮目して待つてゐる者である。

(昭和十七年八月二十四日)

イギリス産業革命の基礎

イギリスが産業革命を完遂して世界の工場として至るところに交通貿易をなし、至るところに領土を保有し、全世界に覇を唱へてゐたために、従來往往にしてアングロ・サクソン民族の優秀性が一般に誇張して考へられてゐたやうである。中世におけるイギリスは勿論、近世の初頭においてもむしろ後進性が強かつた。品質のよい羊毛の産地としてこそ有名であつたが、その労働技術においても、資本においても、イギリスはヨーロッパ諸國からみれば、はるかに劣つてゐたのである。その貿易の如きも、殆どすべてイタリア人・ドイツ人等の外國人によつて行なはれてゐたのである。第十七世紀になつても貿易をしたり、國內に土木業を興すのにも、オランダの資本を借りなければ出来なかつたのである。

かうした經濟状態にあつた時、彼等は決して後にみるやうなアングロ・サクソンの民族的矜持をもつてゐたわけではない。勿論彼等にも故國を愛する情熱はあつた。又お國自慢的な誇りももつてゐた。しかしそこには幾多の先進國があり、その文化は彼等のものよりも遙かに進んでゐた。商業に關してもヴェニスやゼノ

アのイタリイ商人、北ドイツのハンザ商人、技術についてもオランダその他の織匠は彼等と比較出来ないく
らゐ進んでゐた。軍事的勢力をみてもそこにオランダの海軍、さらにスペインの無敵艦隊もあつた。この間
に處して、彼等は巧に自國の發展を計らなければならなかつたのである。

さらに今一つ注意しなければならないことがある。それはフングロ・サクソス民族、即ちイギリス國民の
主體は被支配階級であつたことである。支配する者はノルマン人系統の者であつた。王室も、貴族も、その
點においては外國人であつた。會話にはフランス語が使用され、文書にはラテン語が採用された。英語は地
方語に過ぎなかつた。それが次第にイギリス人自身の自覺と發展とによつて國語となつて來たのは第十六世
紀頃であるといつてよい。その點からみてフングロ・サクソン民族は永い間忍従の生活をしてきた民族であ
る。このことは民族として決して幸福であつたとはいへない。しかしその忍従の生活に打ち克つたことがあ
る。このことは民族として決して幸福であつたとはいへない。われわれは今かうした民族を相手に戦つてゐる
といふことを十分銘記して置く必要がある。

二

かく後進性の強かつたイギリスがどうして他の諸國に先立つて産業革命を成就し、世界に覇を唱へること
が出来たのか。勿論歴史は複雑である。ただ一つや二つの原因で成就されたものではない。幾多の原因もあ

るし、又その際イギリス人の採つた態度のうちにも、われわれの學んで然るべきものもあるし、又學ぶべか
らざるものもある。

イギリスが島國であつて、大陸における各國の政權爭奪の烈しい争鬭の渦中から離れて存在してゐたとい
ふことも、確かに重要な原因の一つであつたらう。殊に中世末から近世初頭にかけて宗教的迫害が甚だしく、
スペインやフランスのやうな舊教國において新教徒を迫害したことがイギリスの經濟的革新に有利に作用し
た。ヨロッパの歴史を眞に理解するためには、キリスト教のことを知らなければならぬといふ人のよくい
ふところであるが、この宗教的感情はわれわれの想像し得ぬほど強いものである。當時舊教國の政治的支配
の下で壓迫された新教徒は比較的安全であつたイギリスに逃亡した。それらの中には熟練せる技術をもつ
労働者や、資本をもつユダヤ人が少なくなかつた。彼等は技術と資本とをもつてイギリスに逃れ、それらの
技術と資本とがイギリスの經濟的革新に大きな役割を演じたことは疑ひ得ない。

しかし一國が大きな發展をするためには、單に外國から資本と技術とが入り込んだだけで出来るものでは
ない。勿論それらの流入によつて、かなりの經濟的發展を促進することは出来るかも知れないが、それだけ
でその國の自主的發展を招來することは不可能である。時には却つて他國人の支配下にその國を置くことさ
へ起り得る。然るにイギリスはそれらの資本や技術を利用したばかりでなく、さらに一段と高度の産業發展
へ進んだのであつた。かかることを可能にしたのは、そこにすでに強い民族的發展力が育生されつつあつた

からである。

イギリスがイスパニアの無敵艦隊を破つたのは一五八八年のことである。それは単にイギリスの偶然の幸運によつて勝利を得たのではない。イギリスの民族的發展がすでにその以前から冒險的商人として、又海賊として彼等を海外に雄飛せしめつつあつたのである。命を惜まぬ彼等の戰鬥力が虚名の高かつたスペイン海軍を打破したのである。その結果はアングロ・サクソン民族に大きな自信力を與へ、彼等の海上發展に對する基礎を作つたといつてよからう。

しかしなほイギリスはオランダ海軍としばしば戦つて、幾度か破れた。そして最後に終にオランダ海軍を破ることが出来た。それは一六七二年のことである。イギリスが優勢なるオランダ海軍を打破することが出来たのは、巨砲を艦船に備へる技術を發明したからだといふ。彼等はスペインの無敵艦隊撃破後も、その海軍力の整備に多くの努力をなしてゐたのである。破れてもなほ挫折しなかつた彼等の民族力には、われわれも大いに學ぶべきであらう。この勝利は彼等に容易に屈服しない精神力を與へるに役立つたのである。

かくして次第に發展していつたイギリスは、亦一時内亂によつてその前途を阻止さるるが如くみえたが、元來國民自身の發展に基づくものであつたから、容易に挫折することはなかつた。勿論そこには幾多の困難を伴つた。オランダと競争してゐたイギリス東印度會社の如きも、一時はあるかなきかの状態に陥つたこともある。又日本の平戸までも發展して來てゐながら、それを撤廢しなければならなかつたこともある。し

かし伸びんとする民族の發展力は、あらゆる障害を打破しつつ世界の各地に侵略していつた。

彼等の欲求するところは商業的利得であつた。如何にせば一國を富ますことを得るかが問題とされた。富と幸福とを單純に結びつけたところに彼等の缺陷があるとしても、第十七・八世紀における世界的交易の完成が目ざましい物質的發展を可能にしたことを注意しなければならぬ。その物質的發展に眩惑せられて、多數の人人がその方面に多くの注意と努力を拂ひ、そこに人類文化の本質的なものがあるかの如く考へる風を生じたことは、人類にとつて不幸なことであつた。

三

かかる對外的發展はその戦争によると、商業によるとを問はず、背後にある國內生産力の強い擁護を必要とする。換言すればその國民のあらゆる産業に對する周到なる熱意が要求される。その情熱の基礎が個人的利益に置かれたことが彼等をして個人的功利主義に對する信仰を強固ならしめたのである。必要は發明の母といふ俚言を作らしめたが、その必要とは彼等にとつては利潤獲得の必要であつた。

しかしここに注意すべき點がある。發明や發見のすべてが利潤獲得に基づくもののみであると解してはならないことである。利潤獲得を目的とする社會にあつては、直接それに役立たぬやうな發明や發見は無視される。故に時には利潤獲得が眞の發明や發見の發達を阻害することさへある。イギリスの産業革命に際して

程度のものに過ぎない。われわれはイギリス産業革命の基礎に二つの大きな力の存することを認めざるを得ない。一つは全體として國民のもつてゐた民族的發展力である。他の一つは個人的利害を無視した科學的精神力である。たとへそれが敵國イギリスのかつて有したものであつても、なほとつて以つてわれらの學ぶべき點であらう。

(昭和十七年十一月十八日)

なされた幾多の有名無名の發見や發明は確かに國內生産力の増大といふ必要に應じてなされたものであらう。しかしもしその最初において個人的自由主義が徹底的に行なはれてゐたとするならば、あの發明や發見は可能であつたらうか。古くから固定された傳統的職業に従事する者にとつて、新しい發明は喜ばれないのが普通である。ワットが迫害を受けたのは有名な話である。それらの發明を保護するやうな國家的權力が早くから發動してゐなかつたなら、あれだけの改革を成就することは困難であつたらう。

又もしすべての發明者が利潤獲得のみを目的としてあれだけの改革を成就したと思つてはならない。多くの發明者や發見者は決して直接に富を目標としたのではない。勿論多くのうちには、その發明發見によつて巨額の富を蓄積した者もないことはない。しかし大部分は貧窮のうちにその生を終つたといつてもよいのであらう。眞の發明發見は利潤の有無を度外視してのみ起る。一つの發明をなすまでには幾多の努力と浪費とを免れない。ただ發明者の不倒不屈の執著力と熱情とに依つて始めて達せられる。一見偶然のことから一つの發見をなしたやうに思はれることも、實は不斷の注意力に外ならず、平常の努力がそれに依つて結晶したものに外ならない。

イギリス産業革命は確かにその商業主義が生んだ成果であらう。しかもそれでさへもそこに現出した技術發展の基礎たる發明や發見はさうした利害判断を無視した者によつてなされたのである。勿論目前の利害によつてなされる小發明や小發見も少なくあるまいが、要するにそれらはせいぜい新案特許を要求するやうな

5

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY
540 EAST 57TH STREET
CHICAGO, ILL. 60637
TEL: 773-936-3200

「社會事業」概念の變遷

社會事業といふ熟語は勿論最近のものに過ぎない。しかし社會事業的行動はかなり古い時代まで遡ることが出来る。社會の一員として不幸にも不適當な者となつた人人を救濟するといふ仕事は、人間の行爲の内でも甚だ尊重すべきものである。ある意味では人間の特質を示すものといつてもよい。即ち人間が他の動物と異なる點である。生物の社會にあつて不適當な性質を有するものは生存を許されない。病氣又は不具になつたもの、老齡のためにその社會に何らの貢獻をなし得ないもの、その他その社會の繼續と繁榮とに少しでも役に立たぬと考へられるものは、常に追放又は殺戮されるのが普通である。生殖の職能を終つた雄蜂や雄蟻の運命は、すべての不適者に共通なものである。彼等は社會の増大に有害無益なものだからである。

生物の社會にあつて無用な存在を除去することは、その社會にとつて最も有利であり、又最も經濟的な結果とみられる。人間の社會にあつても恐らく最初は同様であつたらう。殊にその食物採取の方法が發達してゐない時代にあつては、それらにむしる當然のものとして少しも怪まなかつたであらう。時に原始人中に残

れる棄老の慣習の如きは一つであつたらう。その社會全體に十分な經濟的餘裕がなく、その維持のためには出来るだけの節約を行なはなければならないやうな時に、先づ最初に犠牲となつた者は、それらの不幸な人であつた。その不幸が先天的なものであらうと、後天的なものであらうとは問ふところではない。不幸にも生まれながらにして不具廢疾の運命を享けた者も直ちにその社會から除去される。やや進歩した社會にあつても、それらの不具廢疾は罪惡と同一視されて、他の者と共同生活を送ることを拒否される。

もし人間がこの程度に止まつてゐたならば、それは他の動物と少しも異ならず、人間としての誇りも失はれるであらう。役に立たぬもの、不用のものは、假令それが同じく生を享けた者であつても、これを除去してしまふといふことは、確かに冷靜に考へれば合理的なことかも知れない。又不具廢疾の身を以つて、他の同類の厄介となり、苦痛の多い生涯を送らせることは、その者自身にとつてみても、より一層不幸であるといへるかも知れない。従つてこれが生を絶つことをも正當化し得る場合もあらう。従つて生物の間には自然にこれを排除する本能が出来たのであらう。しかし人間にはその行動に對して忍び得ざる感情が存し、その享受した生命に對する尊重の念へと發達していつたのである。その忍び得ざる心持こそ、人間が人間として他の動物と異なる所以なのである。そしてそこに社會事業的行動の端緒が現れる。

しかし人間の進歩は決して急速なものではない。それらの行動が社會事業として一般に認められ、それらの救済が社會的義務とされるまでには、幾多の星霜を経なければならなかつた。その間にはこれらの社會事

業的行動に對する一般の觀念はかなりに変化してゐる。幾つかの段階を経て始めて今日の觀念へ發達して來たのである。私は今それらの事業の變遷史を語らうといふのではない。所謂社會事業史なるものについては、多くの著述もある。私はただ人間の理念の發達がこれらの不幸なる人人に對し如何に変化して來たかを跡づけ、それに依つて今日の社會事業が如何にして生じたものであるかを説明すると共に、その觀念の變化がやがて又社會事業といふ言葉の内容を將來變化せしむる必要のあることを示唆せんと欲するのみである。

二

人間が集團して、一個の社會生活を送る上に不適當な一員をその集團中に包容することは、その集團を破壊する恐れがないとしても、なほ他の人人に多大の犠牲を強いることになる。何人も犠牲を好む者はない。むかし生まれながらにして不具廢疾を享けるのは、その者自身の罪惡に基づくものとして、自業自得と考へたのは、要するにそれに依つて受けるその社會の迷惑——犠牲を少なからしめんとするために外ならない。生命尊重の念が高められて來ても、なほそれらの者を救済することは憐憫觀以上に出づるものではなかつた。それら先天的廢人の外に、集團生活の邪魔となる者に、幼年者と老人とがあるが、前者はやがて集團の中堅となる者であるから、問題とはならない。彼等は集團生活の内に常に援助と保護とを受けることが出來た。しかし後者は必ずしも常に保護されたとはいひ得ない。ただ彼等はかつて、その集團の中堅として活躍

健全な身體を有し、その社會に優越せる地位を獲得せる者に對して、同じ因果の理法に依つて警告を發するやうになつた。現世において貴樂を享受してゐるのは、過去における善因に基づくものである。將來においてよき生活を得んと欲するなら、現世にあつても多くの善因を積まなければならぬ。世の廢殘者を救済することは、廢殘者のためばかりではない。彼等自身の將來への救ひであるといふ。それは人間の利己心に直接訴へるものである。さらに進んで因果關係を血縁關係にまで發展させる。親の因果が子に報ゆと教へる。これは漠然たる來世を基本とするよりも、一層現實的である。子孫を思ふ人間の本能に訴へるものである。かかる觀念の下に行なはれる社會事業は、殆どすべてが寺院教會などの經營の下になされる。宗教的信條に依つて基礎づけられてゐるだけ、信仰心の強い時代にあつては有力である。そして寺院のこの方面における活動が一層宗教の宣傳的意義を高めることになる。ただそれがやがて寺院の經濟生活に濫用されるに及んで、寺院の多くは本來の使命を忘れて、精神的には極度に墮落せざるを得なかつたのである。かくして事實上不具廢疾者は依然として一般の憐憫に俟たざるを得なかつた。時には却つて以前より悪い状態に放任されることさへ起つた。即ち人人は寺院に寄進することに依つて、自己の良心を満足せしめ、個々の慈善的行爲を中止し、又は中止しないまでも輕減する傾向が強くなつたからである。

多くの場合それらは救貧事業と相混じてゐたし、又「救貧」に對すると同一の觀念的變化をなした。中世にあつて救貧は富者の義務とされてゐた。この點について東西その揆を一にしてゐる。儒教は富者が何が故

し、その社會の維持と繁榮とのために努力した者であるといふ點で、その生存が許されたに過ぎない。又時にそれらの老人の尊い經驗が役立つこともあり、彼等を尊重せしめたこともあらう。しかしそれは恐らく稀であつたらう。ただ過去に多くの功績のあつた老人に對し、彼等の後生を安らかならしむることが、その集團の義務であるといふ觀念の發達した時に、始めて「敬老」思想が一般に承認されることになつた。

だが功勞の有無を測定する社會的基準は何も存在してはゐない。あらゆる老人を尊重することは、時に多くの困難をみる。敬老には限度があつた。社會が功勞ありと認められた少數の老人と廢人とは保護される。それ以外の老廢人はすべて、先天的な廢疾不具者と同様に、ただひたすら他の人人の憐憫にすがるより外になつたのである。

憐憫に基づく社會事業は、人間の理念の發達と共に進歩した。

社會から不適者として排斥されるやうな運命を享けるに至つたのは何故か。何故に不具廢疾を受けるやうになつたのか。それらを單なる偶然として看過し得なくなつた。その解決を現世に求めることは出来ない。過去に求めるか、將來に探るより外に途はない。前者は諦めであり、後者は慰めである。人間が前世において冒した惡業が現世にあつて人交りもならぬ疾病を受くるに至る原因であると解する時、一種の諦めに到達することが出来る。現世における苦痛がやがて來世における救濟の途に外ならないと信する時、現實の苦痛を幾分なりとも輕減することが出来る。しかしそれらは未だ不適者自身の諦め、又は慰めに過ぎない。

に富むかといふ疑問に對し、貧しき者を救はんがためであると教へた。キリスト教にあつても、貧しき隣人の饑餓を放置して、死に至らしめた富者は、最後の審判の日に殺人罪を以つて律せられると説いた。中世社會におけるこれらの觀念は明かに中世的協同社會の基礎の上にたつものであつた。

中世の社會にあつて、その協同生活を繁榮に導くためには、各員の協同が必要であり、又それが個人の義務でもあつた。個人は個人としては何らの意義もない。個人はその屬する社會の一員としてのみ意義がある。個人はその社會において與へられた職能に安んじて働くことが要求される。各自をしてその職能に安んぜしむることは支配者、即ち君主の責任である。かかる社會にあつて、寡寡孤獨の者の存すること、又は廢疾にして救はれざる者があることは爲政者の罪である。彼等を皆無にすることが仁政の基本であり、政治の理想である。従つて彼等の救済は君主の義務でもあつた。

かく宗教的觀念と政治的理想とから、幾多の救済事業が營まれたことは周知のことである。施療や施與が如何に多く行なはれてゐたかは、中世社會史を繙けば直ちに知り得ることである。それにも拘らず、それらの人人を根絶することは出来なかつた。否むしろ反對にさうした人人の群は日一日と多くなつて行つたのである。不具廢疾に依つて自ら生活し得ない者も減少しなかつたばかりでなく、頗る頑健な貧乏人・浮浪人が増加して行つた。わが國の俚言に「乞食も三日すれば忘れられぬ」といふくらゐ、施與に依る安易な生活を喜ぶ者が出来たのである。しかもこれらの人人の群が幾多の社會惡をすら生むに至つたのである。かかる状態は當然彼等の救済事業に對して疑惑を生ぜざるを得なかつた。

三

かかる無差別的慈善行爲が幾多の社會惡を生みつつある時、他方社會思想に著しい變化を生じつつあつた。人人は従來の宗教思想に疑惑を生じてゐた。彼岸思想をすてて現世思想になつた。宗教的又は倫理的因果を信じなくなり、ただ自然科学的因果關係を奉ずるやうになつた。個人的自覺が著しく高められ「我」の覺醒が強調された。その結果従來の救済の無意義が強く唱へられ、各人は自由放任に依つて自然法の下に従ふべしとされた。君主や富者はその政治的・宗教的義務から解放され、適者生存の自然法則は貧窮者に對して殘酷に作用することになつた。かかる變化は社會事業にとつて頗る不利なものであるといはなければならぬ。しかし自我の覺醒に依る自由主義的個人主義が人間の社會に絶對的な勝利を得たと考へるならば、それは誤謬である。個人が常に社會の一員としてのみ生活し得る者であるといふ事實は、絶對的な自由は個人に許されるものではないことを示す。假令自由と放恣とを區別して、自由に何らかの基準に依る限度を設けたとしても、すべての者が主觀的に自由と判定する者を絶對的に許されるといふことは不可能である。協同生活を營む人類社會にあつては、社會生活から生ずる大きな力に對して個人は常に無力である。それが多數決に依るに、少數專制に依るとは問ふところではない。かつて自由主義的思想の全盛時代に、自由の名に依つて

理解をもたなかつたが、かかる行動は一層それらの事業に對する同情を失はせるやうな有様であつた。

世人が社會事業に惡感をもつのは、眞に社會事業の意義を理解しなかつたからである。多くの人が社會事業を單に不幸なる人人に對する憐憫の情から恩惠的になすものと解してゐる間は、未だ社會事業の眞の發展を望むことは出来ない。恩惠的になすものが強制されれば、最早恩惠ではない。強要された寄附行爲は、賣名のための慈善行爲と同様、その實を失つたものである。そればかりではない。強要されることに依つて生ずる不快の念は、社會事業そのものに對する惡感をさへもたせる恐れがある。

社會事業を單なる慈善事業として奨勵するに止まるならば、昔ながらの弊害は絶へることがないであらう。それは單なる救濟事業であつてはならない。社會事業はその社會における不適者を救濟するためになさるる活動を意味するに止まらない。不具癱疾を治療し、老人や幼少年を保護するといふだけではない。社會的に不適者となつた者はすべてこれを救濟し、彼等をして新しき生活に對し活動し得るやうに嚮導する設備をなし、その生命に對する欣びを享受せしむることを任務としなければならない。

かくすることは時に社會事業と社會政策との限界を曖昧にするといふ者もあるかも知れない。しかし社會事業は、學問上又は法律上の定義を問題とするものではない。生きた社會生活を問題とするのである。不幸にして社會的に不適格な運命に陥つた者と雖も、それが單に恩惠的に扶助されるといふだけでは、眞に生命の欣びを味ふことは出来ないだらう。又却つてさらに一層卑屈な精神をもつやうになり、ますます慘な性格

相方共自己を主張した滑稽な場面が展開されたことがある。絶對的な自由主義はただ觀念的に考へられたに過ぎない。所謂殘酷なる自然法則の下に、適者殘存を主張するといつても、それは原始時代の動物的生活に歸ることを意味するのではない。適者の意味はその時代、その場所の文化形態に對して用ひられるに過ぎない。その文化形態の如何に依つては適者も不適者となり、不適者も適者となる。富有なる癱疾者は適者であり、極貧なる健康者が不適者となることが起る。従つて適者殘存の法則は動物界における自然法則かも知れないが、人間界にあつては一つの文化法則である。社會の發達又は變化につれて環境を異ならしむことが出来る。適當な方法に依れば社會に不適者をなからしむることも可能であらう。

しかし自由主義的傾向は一時的ではあるが、その社會に不適當な者を見殺しにすることを許した。無差別の慈善は怠惰を助成するものとして禁止された。しかし眞正の疾病不具に依る貧窮者を救濟すべからずとするほど、徹底的に見放したのではない。一部過去からの傳統に基づく救濟事業は認められてゐた。又新しい組織に依る篤志の救濟事業は許されてゐた。人人の良心にはなほ慈善行爲に對する好感を全然喪失してしまつたわけではない。しかしそれらの事業は自由の名の下にかなり不確實な形態で行なはれてゐた。慈善行爲に對する人人の好意を濫用する弊害は、宗教的良心を失つてしまつただけ、昔よりも一層悪くなつた。不運な孤兒を利用したり、慈善の名の下に押賣をしたりして、秘かに私腹を肥す者が少なくなかつた。殊に一般に道德的水準の低い國國にあつては、さうした私設の不正團體は少なくなかつた。人人も社會事業的施設に

今日は一般に非常時であるといはれてゐる。人類が歴史上絶えてなくして、稀にあるところの變革期に遭遇してゐるといふ意味においては確かに非常時である。しかし一般に非常時といふ時には臨時的とか、一時的とかいふ意味を含んでゐる。現在が特殊な状態であり、何時かはもとの常態と考へてゐるところに復歸するものと思つてゐるやうである。私はこの意味では今日は非常時ではないと考へる。殊に財政の場合にあつては特に然りである。

歐洲の戦亂が短期戦に終らうとも、又長期戦にならうとも、さらに又支那事變が圓滿な終結をみようとも、今日の經濟状態は當分續くものと考へなければならぬ。又よし世界が平和状態に復しても、なほ依然として國際間の武裝的對立には變りがないであらう。その國民の好むと好まざるとを問はず、何時戦争状態に置かれるか解らない境遇が續くであらう。何時まで續くか。當分とは何時までかといふことは何人も斷言し得

財政制度改革の必要

— 史的反省 —

を形づくることにならう。彼等のために出来る限り活動の途を切り開き、いささかなりとも仕事を與へるやうに考慮することが必要である。彼等も社會の一員として生を享けた者であり、その點においては他の人人と何ら異なるところはない。たまたま先天的又は後天的の原因から、一般人と同様の活動が出来ないといふだけである。社會は全體として彼等に活路を與へる義務がある。

これと同じ意味から社會事業は個人的恩惠の下に行なはるべきものではない。假令ある篤志家の寄附行爲に依つて創設されたものであつても、その篤志家の恩惠を強調することは社會事業のやうなものにあつては正しくない。被援助者が自己の意思から感謝することは勿論妨げないが、外界から、殊に寄財者自身が恩惠を強要すべきではない。社會事業は元來社會の協同生活を全體として高め、進歩せしむるために營まるべきものである。従つて社會事業に對し一般の觀念が進歩すれば——換言すれば人類の協同生活に缺くべからざるものと解するやうになれば、恩惠的扶助の觀念は喪失するであらう。わが國において昨年社會事業法の制定されたことは、その法の適否、範圍の是非は暫く置くとして、社會事業に對する一般の觀念が以前とは異つて來たことを示すものである。さらに將來における社會事業の意義は、全體社會の發展を基本として考へる場合、ますます重大となつて來ることは否定出來ない。そして社會事業といふ言葉は一般に社會政策とも關聯し、從來より廣い意味に解釋されるやうになるであらう。

(昭和十四年五月十五日)

が如何なる性格を有するものであるかを知らば、日本が假令支那事變に従事してゐなくとも、軍備の充實を餘儀なくされることが解るであらう。

今回の戦争は從來の世界の經濟構造並びに分布を打破せんとして生じたものである。勿論この現状打破の傾向が戦前すでに幾多の現象に現はれてゐたことは周知の如くである。この現状打開は決して容易なことではない。武力に依る解決がどの程度まで成功し得るか疑問である。人類が何らかの新しい解決策を發見し得るまでには、相當長日月を要するであらう。新しい經濟構造は徐徐に建設される。その結果がどうであらうとも、その間一國が獨立的地位を確保するためには、結局多額の軍事費を必要とする。歐洲における弱小中立國が如何なる運命に陥つたかを知らば、このことは明かである。日本が滿洲及び支那に新しい經濟的秩序を建設せんとすれば、今後一層軍事費の縮少は容易に望み得ないことである。

かつ又今日の政府が單に政治的統一機關たるに止まらず、國民經濟の中樞的機關と化しつつあることは、何人もこれを承認するであらう。現に今日の程度であつても、必要品の配給に際しても、又國民労働力の配分に對しても、國家が重要な役割を有し、その行動が全般の生産力に甚大な影響を與へ、又國民生活に幾多の變化を生じてゐることは、極めて明瞭な現實である。かかる情勢の下において、その財政が依然として從來と同一機構を有してゐるといふことは不可能であるといはなければならぬ。財政制度の改革は當然要求されるべきであらう。

ないだらうが、相當長期に亙るものと覺悟しなければならぬ。この場合今日の狀態は非常時ではなくして、ある程度まで恒久的な常態とみななければならぬ。

もしこの前提が承認されるならば、われわれは今後の國民生活にかかる狀態の上に樹立して行かなければならぬ。非常時の意識の下に徒らに緊張するのみであつてはならない。張りつめた糸は切れる。一時的な緊張は誰でも出来るが、長期に亙つて緊張し続けるといふことは不可能である。敵兵の襲來を受けた時、國民は確かに緊張するであらうが、その精神狀態を何時までも持続することは困難である。

かつ又今日の狀態が繼續するものとすれば、その狀態の下にあつて國民は幾多の文化的活動を行なふべきである。各人の文化的創造力を十分に發揮させ、又一般國民の厚生の諸施設はますますこれを向上させなければならぬのである。従つてここに從來の方法とは違つた手段と組織を案出して、國民が安んじてその全能力を發揮し得るやうな政治を實現する必要を生ずる。

かうした狀態の下にあつて財政は國民生活の上に重要な役割をもつ。現在統制經濟の進展と共に、財政の膨脹は當然起つて來た。それは單に支那事變下といふ特殊狀態に基づくだけのものではない。時にかういふ話を聞くことがある。日本がもし支那事變に遭遇してゐなかつたならば、歐洲大戰は大なる經濟的利益を日本に與へたらうと。それは中立國として多少の經濟的利益を獲得し得るかも知れない。しかしもしそれをよいこととして晏如としてゐたならば、極めて危険な狀態に陥ることを覺悟しなければならぬ。今回の戦亂

財政の變遷を歴史的に辿つてみれば、常にその時代時代の社會情勢に適應してゐるものである。勿論過去に近世的國家が存在してゐなかつたから、今日と同様の意味の財政が常に存在してゐたわけではない。財政とは何であるかを敢てここで定義しようといふのではないが、財政は廣義に解すれば、人類が共同生活を營む上に必要な共同的負擔の經濟である。この種の共同經濟はこれを構成する各人の自由意思に依つて、その負擔を免れ得る性質のものではない。一つの強制的結合に基礎を置く經濟である。それが強制的なるが故に、常に一つの權力主體が豫想される。權力主體の形態を異にすることに依つて、財政の性質は著しく異ならざるを得ない。

人類が原始的な共同生活を營んでゐた時代には、その生活全體が一つのものであつたから、個々の私經濟は未だ發達せず、全體の經濟のうちその一部として包含されてゐたに過ぎない。従つてそこに權力主體だけの經濟、即ち後の公經濟と呼ばれるものは存在せず、すべてが一個の財政を形成するに過ぎない。ただ特に注意すべきは、その共同生活が常に神祕的な呪力的な力に依つて支配されてゐたから、これに對する感謝の念から、その労働又は労働の成果の一部を捧げてゐたことである。これはある意味での權力主體である。その民族が彼等を保護する神に對して、その年の收穫の十分の一を獻ずるといふことは、やがて共同生活

の恒常的保護に對する謝恩の意味を生ずる。初期にあつて神神に奉獻されたタイスは、未だそれに依つて共同生活を直接支配する手段とはされなかつた。單に神に奉仕する一團の人人の私經濟を營む資源とされたに過ぎない。

やがて土地の重要性が著しく高くなり、土地を給與されたり、保護されたりする恩恵に對し、權力者に貢租を呈する風習を生じた。この場合權力主體は武力である。従つて給恩に對して武士として奉公義務を果たす者には貢租の負擔はない。最下級の農民のみが貢租並びに賦役をなすの義務がある。それらの權力主體の經濟には公私の別なく、これらを財源とするものである。

この場合注意すべきことは、それらの貢租に二種あることである。一つは領主の本來の隸屬者から納められる貢租であり、他の一つは元來土地所有者であつた者が、自己の土地を擁護し得ず、土地を獻納して小作人となつた者が、その獻納の際約束に應じて納付する貢租である。後には兩者が混淆されるから、一見區別なきが如くであるが、貢租の性質を明かにする上に重要な意義を有する。即ち前者は領主の經濟の本體をなすものである。元來自給自足を原則とする封建領主の經濟はこれらの隸農の労働に依つて維持される。その労働の成果は悉く領主のものであつて、隸農のものではない。隸農はただ生活資料のみを與へられれば満足してゐなければならぬ。その貢租は生活保護に對する報恩であつて、土地の保護に對する謝恩ではない。又それは契約でもない。然るに後者は一種の契約である。土地の保護を乞ひ求むる時の條件として、武力保

護に對する反對給付として納付する貢租である。彼等は労働の成果を全部沒收さるべき理由はない。彼等は常に農民としての得分を保有する。

かくの如き方法が採用されたのは、當時は分權的であり、領主はその貢租に依つて、單に領内の統治と自己の一家の經濟とを支持すればよかつたのである。その軍事費は封祿を與へ、恩顧關係に依つて構成されてゐたから、特に多額の費用を必要とはしなかつた。國王とても同様で、尨大なる常備軍を維持する必要がなかつたから、大なる豫算を必要としない。それでもなほ後には彼等貴族の生活が奢侈になり、又不斷の軍事的行動に依つて、多くの費用を要するに至つたから、貢租は極限まで引上げられるやうになつたのである。中世末から近世にかけて、中央集權的傾向が各國に起り、國王の財政は到底この私經濟的封建的收入を以つてしては不足になつて來たのである。

第一に軍事費の膨脹である。從來の封建的方法は勿論中央集權的國家ではこれを採用することは出來ない。地方諸侯の勢力を微弱ならしむるためにも、中央の軍事的勢力を擴大し、これを常備する必要を生じたのである。そのためには多額の費用を必要とした。

第二に外交關係の複雑化である。從來王室と外國の王室との交際はあつても、それは單なる私的關係に過ぎなかつた。そこに國家の主權者としての威權を保つために、多くの費用を必要としたとしても、それはその私經濟で行なはれる範圍を限度とした。王室が國家の代表として行動するやうになると、使臣の派遣その

他に多くの費用を必要としたし、殊に軍事的行動に及ぶことがあれば、到底王室の私經濟で賄ひ得るものではなかつた。

第三に國內の費用の増加である。人口の増大と國內の統一とが、いろいろな費用を要求した。交通量の増大は橋梁や道路の建設維持を從來の如く、地方の個々の負擔に一任して置くことを不可能とし、又貧民の増加は單なる宗教團體や慈善家の行爲では不十分なものとなつてしまつたのである。従つて國王がその私財を以つて、これらのすべてを辨することは勿論不可能である。

かくの如き事情が漸次に近世的財政の萌芽を作り出したのである。上述の如き諸費用は單に國王だけの負擔すべきものではなく、國家の全員が共同して出すべき性質のものであると考へたのである。勿論すつと以前にも共同的性質を有するものを全員が負擔した先例はあつた。例へば外敵の襲來に對して防禦するために各人から租税を徵發した。ここに租税といふ貢租とは違つたものが生まれて來た。又封建諸侯がその收入の増大を計るために、自己の勢力下にある都市に出入する者から税を徵發した。又橋梁を架すれば通行税を取立てた。その外窓税とか、竈税とか、いろいろあつた。かうした意味では使用料的な、又は特許料的な税が創設されてゐた。

近世國家の新しい事業が多額の費用を必要とする關係から、その財源をこれらの租税に求めたことは當然である。そして又國王の私經濟からこれを分離する必要のあつたことも明かである。何故ならば、それらの

混淆は國王が悪意の流用を敢てせぬとも限らぬからである。イギリスの如きは課税の権限をも國王から議會に奪つたのである。そしてここに國家を權力主體とする近世的財政制度を創設したのであつた。

勿論これらの事情は細かい點に互れば、各國共に必ずしも同一ではない。しかし大體の傾向においては同じである。わが國にあつても、江戸時代にその財政は徳川氏の私經濟に過ぎなかつた。その末期に及んで外交問題が起るや、その以前からすでに借金政策で僅かに糊塗してゐた財政は一層窮乏を告げ、遂に破綻を來たしたのであつた。封建的財政は維持し得ずして、歐米の近世的財政を模倣したのであつた。

三

以上の極めて簡単な、大ざつばな叙述に依つても、その財政制度が時代の變遷に依つて變化してゐることは明瞭であらう。かつては臨時的なものであつた租税制度が、近世になつては財政の中心をなすものとなり、かつては恒常的なものであつた貢租は廢止されてしまつた。その結果はどうなつたか。租税を以つて賄ふ國家の經濟は公經濟であり、軍事とか、警察とか、教育とか、その外共同的負擔のみに限り、出来るだけ租税負擔を軽減して、國民の私經濟的活動を十分に發揮せしむるやうにすることをよしとした。

その社會的背景には當時の自由經濟的情勢があつた。國家の活動を極度に限定して、個人の企業心を以つて、その國の經濟的活動の源泉たらしめんとした。課税は出来る限り低きを理想とした。しかし實際にはか

なりの困難があつた。戰爭は常に多額の費用を必要とした。課税を喜ばぬ結果は、公債政策に依るに外なく、多額の國債が負擔として後世に遺された。それでもなほ平常の状態に復すれば、稅收入に依つてある程度まで減少せしむることが出来た。しかしそれは軍事費が未だ今日のやうに多額なものにならず、又國家の活動が今日の如く全面的になつてゐなかつたから、可能であつたのである。

租税が漸次に高められていくことは、國家の經濟的活動が擴大されれば、當然生じて來ることである。しかし租税負擔が重荷になつて國民の一般的企業心を鈍らせることは面白くない。そこで社會政策的な性格が租税に取入れられ、同時に社會政策的諸事業が國家の援助又は經營に移される。國家の經濟的活動は次第に擴大されて、幾多の財政理論を生み出すことになつたのである。

現在の國家財政に依つて運用される範圍はさらに擴大され、從來純然たる私經濟的活動に一任されてゐた純粹經濟の領域にまで及んでゐる。従つて支出の項目における擴張は頗る顯著なものがある。しかもその支出内容は頗る多岐に亘つて來た。勿論多くの場合それらは全國民——消費者の必要缺くべからざる産業部門に限定されてはゐるが、必ずしも全面的に全國民の共同的負擔に歸すべき性質のもののみであるとはいへない。

かく今日の財政はその内容において昔日の比ではない。然るに依然として租税と公債とを以つて遣り繰りして行くことは、かなりの困難があるのではなからうか。かつて江戸時代に貢租と借金政策とを中心として

やつて来て、遂に破綻を生じた。貢租の過重が農業生産力を低下せしめたことは史的事實であるが、租税の負擔能力も何時かは同様の限界が来るに違ひない。

かつ又今日の財政は直接純粹の經濟的活動に觸れることが多いから、昔日の如く單なる收入支出の技術的解決を以つて満足すべき時代ではない。國民經濟全體から（一）特に一國の獨立に必要な諸經濟資源と相關關係を考慮し（二）動もすれば物價騰貴を惹起する恐れが多い公債發行を以つて經濟活動を不可能ならしめぬやうに注意し（三）一國の全生産能力を審かにし、これと相調和し得る財政計畫を樹立すること等、これらを従來の財政制度を以つて遂行することはかなり困難である。今日の狀態にあつて改善すべきことは多多あるが、一國國民經濟の中樞機關としての財政制度の全面的改善はその重要なものの一つであらう。これ敢てここに少しく歴史的反省を試みてみた所以である。

（昭和十五年六月十二日）

技術と組織

—

文化發達の跡をみて來ると、人間が如何に與へられたものを生かすことに苦心したかを知ることが出来る。自然が人間に提供してゐるあらゆるものを利用し、自己の生活に役立ててゐる。それは他の動物が本能的に與へられたものを以つて巢を作つたりすると異なり、意識的にこれをする。従つてその出來上つたものは時に頗る不出來な場合がある。しかしさらにそれをよりよきものにしようとして努力する。苦心する。そしてそこに技術の進歩・改善が成就された。

蜜蜂の巢が如何に精巧であつたとしても、少しの進歩・發達もみられない。原始人の製作は如何に拙劣であつても、漸次に改善する意圖が含まれてゐた。そして今日までの間に著しい生産技術の發展をみたのである。われわれはその有するところの技術を改善し、發達させることに依つて、自然の與へるところのものを出來るだけ利用することに成功した。昔の人は土地の無盡藏であることを説いた。人間の技術の進歩するにつれて、今後ますます利用されるものが多くならう。かく技術が進歩して來たために、人間は他の動物を征

服し、さらにあらゆる自然現象をも利用せんとするに至つたのである。

これらの點からみて、人人が技術の重要性を認めることは當然である。殊に最近自然科学の發達があらゆる方面に互つて技術的才能を必要とし、要求して來た。機械が人間の個人的手工的技術に代つたといはれたのは一昔以前の機械生産であつた。今日の精密な機械を使用するためには、特殊の知識と訓練とに依つて作られた技術が必要とする。技術家の養成が目下の急務とされる所以である。

この種の専門技術家を必要とするのは、單に精密機械を運用する工業方面のみではない。經濟的機能があらゆる方面において複雑多岐になつた今日においては、人間の經濟生活全般について同様なことがいはれる。例へば物資の配給といふやうなことも、その配給技術の巧拙は著しい影響を社會全般に與へる。一工場内の配給技術の如何は、その工場能率に多大の影響を與へる。

二

他方今日のやうな戰時體制下において、物資の不十分な時代にあつては、各人に手工的技術が要求される。出来るだけ手に入り易いもので代用するといふことになれば、當然自給自足的傾向を生み、一寸した技術は誰でも知つて置くことが必要になる。以前は技術を知つてゐる方がよいといふ程度であつた。自轉車に乗れる方が乗れないよりはよいといふ程度であつたが、漸次に乗れなければ困る。一つの資格として要求さ

れるやうになる。それらの必要がわれわれの日常生活に關聯してゐるだけに、人人は技術習得の必要をしみじみと感ずる。

かく近世における産業技術に對する認識はすでに數年前から高められ、猫も酌子も技術技術といひ出してゐたが、さらにそれが目前の手工的技術に對する實感から、一層技術の必要が力説されるやうになつた。連製技術家の養成が急務となつて來た今日では、技術の研究なくしては實踐的ならずとさへ考へる傾向が強くなつてゐる。だが私はここに多大の疑惑をもつ者である。

目前の急のために技術家を養成するのはよい。會計係を作るために算盤のよく出来る者を獎勵するのもよい。だがそれは果たして眞の技術を發達させる上に役に立つであらうか。又經濟組織の發展に役立つであらうか。技術の重要なことはいふまでもないが、技術は如何に優秀であつても結局一つの技術に過ぎない。技術の優秀性は全組織内に一定の適所を得た時にのみ發揮される。その所を得ざる技術は、如何に優秀であつても何もならない。しかもその技術自體も亡びる。むしろ技術は組織の發展性に依つて形成され、養成されていくものであらう。従つて不十分な組織の下で眞の技術は發展し得ない。

三

技術はある程度まで模倣し得る。殊に器用な者であれば相當のところまでいくことが出来る。模倣に依つ

て形成された組織は完全な意味での組織ではない。元來組織はそれを構成する人的要素と物的要素との完全なる綜合體でなければならぬ。

明治以後わが國は西洋資本主義の生産組織を模倣したといはれてゐる。そしてそれに成功したといふ。しかしそれは決してイギリス式でも、アメリカ式でも、又ドイツ式でもない。資本主義生産組織の技術はこれを模倣して、あるひは成功したといへよう。機械生産の技術でも、資本金融の諸制度でも、それらは歐米のそれを模倣した。そしてそれをある程度まで自分のものにしたのは、それらの技術を消化し得る素養があつたからである。しかしそこに生じた組織はわが國特有の人的、物的要素に應じて變更され、脱化され、歐米のそれと同一のものにはならなかつた。

ドイツの組織を模倣せんとして、先づそこで行なはれ、成功した技術——この場合技術の意味は廣義に解する。一つの制度のやうなものを含む——を模倣し、そのままに移植しても決して成功しない。それを構成する物的要素や人的要素がかなり相違する場合に、單純な模倣は徒らに紛糾を増大させることになる。理論として當然うまくいかなければならぬと思ふやうなものでも、うまくいかない。それを構成する諸要素が異なるからである。

その意味で最上の組織はその社會に生み出されたものでなければならぬ。それを構成する人間が自身で生み出す必要を感じ、生み出す力をもつてゐる場合には、自ら形成され得る。それは安易に出來るといふ意

味ではない。全員の努力と精進とを必要とするし、又それに伴ふ苦痛も避けられない。如何なる經濟組織がその國民にとつて最も妥當であるかをあらゆる角度から考究するのが、國民經濟學の任務である。技術論は經濟學とは判然と區別されるべきである。生産技術の眞の進歩は、その國民に適正な經濟組織が構成された時にのみ可能である。

(昭和十五年十二月二十五日)

技 術

— 斷 章 —

技術は人間がその弱點を補はんがために、案出したものである。だがそのためにその弱點はますます甚だしくなつていつた。

技術はそれ自體争闘性を有する。自然に打ち勝たんがために、他の動物に打ち勝たんがために、さらに他人より優秀ならんがために、技術は進歩し、發展した。競争なきところでは技術の進歩は停止する。退歩することさへある。戦争は技術を急激に進歩させるのには最も有効である。鎗と楯とは常に相互に進歩する。

技術は手段であつて、目的ではない。だが技術を修得するためには、一つの精神を要する。争闘的であるといふ點において對外的であるが、向目的であるといふ點において對内的である。科學者は對内的な意味で技術の向上を計るが、社會は對外的意味においてのみ技術の意義を認めてゐる。

熟達せる技術は機械的となる。「機械」そのものはある生命を有するものであるが、機械的といふ形容詞は精神的意義を失ふ。技術は熟達して精神的なるものを失ふ。それにも拘らず、人は機械的なる技術を賞讃する。

機械に生命あることを理解せざる者は、機械を十二分に作はたらかすことが出来ない。發明者の心持を以つて機械や器具に接する労働者は、それらの生命を無限に延ばすことが出来る。

技術は模倣に依つて修得され、普及される。だが技術の精神は模倣に依つては會得することが出来ない。猿でも人の技術を真似るが、その精神は永久に知り得ない。猿のやうな技術家が無數にゐる。

模倣に依る技術の普及史を書いて、技術史だと思つてゐる者が多い。眞の技術史は技術のうちに宿る精神の發展史でなければならない。技術が模倣に依つて普及する分野は、文化交流の歴史に屬する。そして恐らくそれは社會史又は經濟史の一部に歸屬すべきものであらう。その點からみれば模倣は決して輕蔑すべきものではない。萬人は皆模倣に依つてのみ、社會生活を營み得るものである。ただ極めて少數者だけが、それ

を以つて満足し得ないのである。

技術の對外的意義のみをみて、その發達を論ずる時は、近世における技術の發展はすばらしいものである。のみならず、一般にそれを文明と稱する。この誤れる文明觀が現在の世界的混亂を生じたといつてもよす。技術そのものに内在する精神的發展は極めて遅遅たるものである。いまだに原始的便宜主義以上に出でようとしなす。たまたまそれ以上に進む個個の天才はあつても、一に對外的意義に制約されて、湮滅されるか、默殺されてしまふ。それは技術を生かすべき筈の組織に缺陷があるからである。

技術を生かすものは、それを生み出した組織である。今の組織は技術を生み出すだけの力をもつてゐる。だがそれを本當に生かすことが出来ない。技術の窮極的發展を機械化にあると思つてゐるからである。眞の技術はそれが機械化された時に死滅する。技術が機械となつて表現されても、技術が生きてゐる限り、機械化されない。そこに生命があるからだ。故に眞の機械は不熟練工や素人に依つて運用され得ないのは勿論、模倣的熟練工に依つても不可能な筈だ。

技術の極致が機械化にありと考ふる者が多いことが、やがて人間その者をも機械的にみることになる。す

べての人間に同一服裝を與へ、同一同量の食物を給與し、同一時間の勤勞を要求することが、最も公平だといふ誤つた觀念に到達する。原始人はすべてのものを平等に割ることを好む。社會主義者もかつてそれを公平と考へてゐた。赤坊は大人と同様の割前を要求する。すべてのものを單純化し、抽象化し、平等化するこのみを科學的だと思つてゐる者がある。それは生命の面を忘れてゐるのである。人間の生命の意義は常に同一でないことにある。蟻や蜂の生活とは異なつた面をもつところに、人間生活の特徴が存する。技術に關する對内的發展の歴史を述べける時に、初めて生命の意義が理解されるだらう。(昭和十六年九月二十一日)

技術的精神の必要

一

今日の社會情勢にあつては技術家の養成が急務とされ、又技術の重要性が著しく強調される。しかし未だ技術の眞の精神について、あまり説かれてゐないやうに思ふ。技術がその精神を伴はずして傳習される時は、到底その發展を期待することが出来ない。眞の技術は模倣に依つて獲得し得るものではない。外面的模倣は比較的容易である。少し器用な人間ならば、容易に模倣することが出来る。通俗に猿真似といふが技術の本質を理解せずして、外面類似のことをなすをいふ。

技術の習得に器用であることは、確かに便利であることは疑ひない。器用な者は無器用者よりも人に重寶がられる。世に「器用貧乏」といふ言葉がある。器用なるが故に、人に重寶がられ、いろいろな仕事に使はれ、おのれも自己の器用なことに慢するやうになり、何時か表面的な模倣のみを事とし、その本質を見失つて、生涯何ものをも得ずして終る者である。技術にとつて器用なことは重寶であるが、それ以上のものではない。作圖や製圖を巧みに描くことを以つて技術家の資格であるが如く考へるのは大なる間違ひである。

眞の技術家は技術の本質を明確に把握し得た者でなければならぬ。たまたま子供が器用であるからといふだけで、技術家たらしめんとするが如きは誤りといはなければならぬ。わが國は後進國であつた。歐米の技術を習得するに、あまりにも急であつた。それらの技術を器用に模倣し、移植し、當面の急に應ずることが出来さへすれば、それで満足してゐた。もしこれを以つて、わが國の技術の水準が先進國のそれに到達し得たと思ふ者があれば、それは間違ひである。かかる模倣が器用に行なはれば、行なはれるほど危険である。表面的類似に自己満足を感じ、眞の技術の發展を考へなくなるからである。

二

技術を本質的に理解するためには、技術を全面的に知り盡さなければならぬ。單にその技術の外面的な知識だけでなく、その如何なる部分についても、それらがその技術全體に對して有する任務を十分に知悉する必要がある。例へば一個の機械を使用する場合でも、その機械の全體としての性能を明かに知ることはいふまでもない。その機械に屬する一本の釘、一枚の齒車についても、確實な知識をもつことを必要とする。やや抽象的ないひ方ではあるが、自己と技術との全面的合一を意味するものであり、やがてそこに技術愛ともいふべきものを感じさせるほどの精神的高揚を生ずる。

技術家はこれに依つて初めて技術家たり得るといつてよい。又技術はそれに依つて初めてその技術のもつ

全能力を發揮し得るものである。大工のやうな手工業的技術家が、昔その道具を神聖視し、そのためには血を以つても争はんとするほどの強い愛着心を感じたのも、全く同じ精神である。藝術家がその藝術を創造する時の精神と少しも變りがない。技術家はその境地に到達した時こそ、新しき技術の發展を可能ならしむるものである。かくて初めて技術が習得されたといふことが出来よう。

模倣に依つて習得し得た技術にあつては、かうした精神を體得し得ない。その場合技術は生命を有たぬ。死物に過ぎない。従つてそこには眞の發展を期待し得ない。創造的なものを全然缺如する。ただ外國において創造されたものを眞似てゐるに過ぎないから、一度外國との關係が杜絶すると、忽ちその進歩が停滞する。歐米から書物が輸入されなくなつて、學問研究に支障を來たすだらうといふ意見は、結局わが學界の水準がこの程度の模倣を出づることの出来ない故である。もし學界の水準が彼に劣らぬものであり、模倣以上のものであるならば、自ら創造的發展を生ずる筈であり、外國からの研究書が輸入されなくとも、少しも困る筈がないのである。

創造的精神が十分に起れば、技術に對する愛着は自ら感ぜらるるものである。愛を以つて技術を運用する時、又自ら創造的ならざるを得ない。兩者は相關的である。多くの人がこの點を理解すれば、資源愛護等も奨励せずして成就し得る。機械や器具を不適當に使用して破損したり、無駄な勞力を消耗したりすることもなくなる。

三

近時物資の缺乏と軍事的必要とから、日常必需品の如きは、多く代用品を以つて補はなければならないやうな状態にある。代用品といふのは、結局最も適當な資材が使用し得ないために、これに次ぐ適當なものを以つて用を達すのである。貨幣經濟の下にあつて、不適當といふ言葉のうちには、必ずしも資材が劣等であることのみを意味しない。高價である場合も不適當なのである。従つて代用品のうちには高價ではあるが、使用には本品と同様、又はより以上に適當なものもある筈である。代用品は高價にして劣等であるとは限らないのである。然るにわが國において、現在生産されつつある代用品の多くは、粗悪にして高價である。一日使用すれば破れるやうなスフの足袋が、如何に多くの資材を無駄にしてゐるかは、敢て説明を要しない。代用品といへば、直ちに粗悪品のことを意味するくらゐである。

代用品といふ言葉は決して粗悪品といふことではない。機械は手の代用品である。だが手よりも却つて精巧である。多くの發明や發見は代用品を探すことに依つて生じたのである。代用品が元の品よりも遙かに優秀なものになつて、初めて代用品の價値が生ずる。ここにもわが國の生産技術の缺陷を指摘することが出来る。

生産者が目前の間に合ひさへすればよいとして、極端に粗悪な品を生産する。消費者も非常時ではあり、

代用品だからといって我慢する。かくして粗悪品が市場に氾濫してゐるのが現状である。かかる状態からは發明も發見も起り得ないし、技術も進歩しない。その原品が如何なる用途に使用され、如何なる性能を有するかを十分に理解して、その代用品を製作せねばならない。こんなことは勿論解り切つたことであるが、それが實際には行なはれてゐない。表面だけ類似してゐればよいとする。もしこれらの點を眞に理解してゐるならば、一度水に漬ければ駄目になるやうな手拭が生産される筈がない。

國産が舶來品に劣ることは、今始まつたことではない。表面だけは兩者殆ど同様であるにも拘らず、否時には見たては國産の方がよい場合も少なくないに拘らず、質においては雲泥の差がある。模倣精神のみが働いてゐるからである。

人はその原因を營利的精神に歸するかも知れない。しかし營利主義の本場であるといふイギリスでは却つて起つてゐないのどういふわけか。むしろすべて表面的な間に合せ主義を以つて物事を安價に片づける風が、この弊害を生ずるといへよう。一日を糊塗して、明日のことを考へない國民的性格が、この弊害を大ならしめる。物事の本質を握らうとせず、ただ末梢的類似のみを志すが故に、眞の技術の發展がみられない。

本質を理解すれば、形式は同一なることを必ずしも必要としない。本質に適するやうに、資材を配置することに依つて、従來とは全く異なつた形式を案出することが可能になる。同一形式のものを作らうとして、素材の本質をも無視し、原品の本質をも忘却し去つて、粗悪極る代用品を作るのである。紅茶の本質は赤い

ことにあるのではない。その香りにある。紅茶といふ名と外形に捉はれて、香りも何もない赤い湯を紅茶と稱して賣つてゐる。

本質を理解して、初めて新しきものを創ることが出来る。もし技術家が技術の本質を十分に把握・理解してゐるならば、當然内面的な創造力が湧き出て来る。資材その他の不足から、従來行なつてゐたやうな技術を、そのまま追行することが困難になればなるほど、新しい創造力が働いて来る筈である。外形や形式に捉はれずに、徒らにそれらを模倣することに醜態せず、よりよきものへの精進が行なはれる筈である。事が緊張を要すれば要するほど、人間の頭腦の働きは鋭敏になる。もし今日のやうな時勢に、よりよき發明や發見が生じないとしたならば、それは従來の技術家が單に模倣のみを事として、眞の技術的精神を忘却してゐたからである。そして又わが國の技術教育に大なる缺陷があることになる。私は技術家養成の聲が盛んに叫ばれてゐる現在にあつて、なほ一層技術的精神の涵養を必要と考ふる者である。(昭和十六年十月二十六日)

著者紹介

大正七年慶應義塾大學理財科卒業
業後同大學專攻現在經濟學部教授
三月歐洲留學。西洋經濟史特に英吉利經濟史研究の成果をもつて日本經濟史並に思想史の研究に専念今日に至る。目下「日本經濟史」全十二卷の執筆に専念。
主要著書

- 「英國資本主義の成立過程」 (有斐閣)
- 「一般經濟史概論」 (有斐閣)
- 「概観日本經濟思想史」 (慶應出版社)
- 「徳川時代の經濟思想」 (日本評論社)
- 「むかしと今と」 (ダイヤモンド社)
- 「經濟史」 (ダイヤモンド社)
- 「近世經濟史概論」 (同文館)
- 「徳川封建社會の研究」 (日光書院)
- 「江戸時代の經世家」 (ダイヤモンド社)
- 「商業政策講話」 (ダイヤモンド社)
- 「維新前後」 (日本評論社)
- 「探史餘瀝」 (ダイヤモンド社)

探史餘瀝

昭和十八年六月十日初版印刷
昭和十八年六月廿日初版發行

(大島製本館)

著者 野村兼太郎

發行者 石山 皆男
東京市麹町區霞ヶ關三ノ三

印刷者 (東京三三) 神尾 福太郎
東京市麹町區霞ヶ關三ノ三
ダイヤモンド社印刷部

發行所 東京市麹町區霞ヶ關三ノ三
ダイヤモンド社
會員番號一六五二〇
振替東京二五九七六
電話銀座四一五五一九

出文協承認 ち 440618
(初刷 2000 部)

定價 六圓
特別行爲 三十錢
税相算額 六圓三十錢
合計 六圓三十錢

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

落丁・亂丁等の品は當社にて御取換申します

終